532
3

設

15. 9. 29

人る作夢

瀬無極成

內外出版株式會社發行

大正
13.9.9
內交

132-3

緒言

これは大正十年（一九二一年）の秋から同十二年（一九二三年）の冬に亙る私の外遊中の印象記を蒐めたものであるが、獨米を中心としての在外滿二年間の紀行としては本書に收めたものは豫定の約半ばにしか當らない。私が最も永く滯在した伯林だけを取てみても、例へばその近郊の「シュプレエのヴエニス」と呼ばれる勝境などはまだ書いてない。更にニュルンベルク、ミュンヒェン、ザルツブルク、ウイーン、ブダペスト、プラアグ、それから私が一學期を送つたハイデルベルク、これ等に就ては是非書いておきたい。瑞西、白耳義も逸するわけにはいかない。藝術の方面では、一般の觀劇談は別としても、せめてオーバアアムマアガウの「基督受難劇」と瑞西ゼルツアッハのそれとの比較や、バアデン・バアデンの人形芝居の事などは誌しておきたい。然し身邊の事情と書肆の都合と

で今それ等を纒めて完全を期することは出來ないので、取敢ず伊太利紀行を以て一段落とした。もともと興味中心の物だから何處で切つても可いわけだ。

「夢作る人」といふ題はボストンで見たある劇に因んだ本文の一節の名から取つた。之に就ては多く云ふ必要はあるまい。「夢みる力の無くなつた者は生きる力も無いのだ」といふエルンスト・トラアの言葉がよく私の心もちを語つて呉れる。

筆を擱いて靜かに眼を閉ぢると無數の人々の俤が無數の背景を持て走馬燈のやうに現はれてはまた消えて行く。そこに私のほゝ笑みも涙も織り込まれてゐるのだ。自分自身にすらはつきり告げ難い事がある。どうして悉く筆に上せえよう。私はたゞ心の中でそれ等の人々に會釋し、また感謝しておくより外は無い。

本書の内容は全部「大阪朝日新聞」に連載せられたものである。唯、卷末の一篇は歸朝後雜誌「改造」で發表したものを採つた。併せて兩社の厚意を謝する。

目次

歸朝に際して（序に代ふ）……一
屋根裏より……一
船旅……一
シャトル……一
市俄古……一六
紐育（グリーン井ッチ・ヴイレーヂ）……二六
夢作る人（ボストン）……三一
豌豆の花（倫敦）……五〇
花の都（巴里）……六九
ライラックの花咲く頃……八五
伯林及近郊……八五

夢作る人

ゲエテの足跡……九八
ハウプトマンの還暦祝賀劇……一一〇
緒　言……一一〇
フロリアン・ガイエル……一一五
馭者ヘンシエル……一一〇
犧　牲……一一三
沈　鐘……一一八
獺の衾……一二一
ロオゼ・ベルント……一二四
カアル皇帝の人質……一二八
寂しき人々……一四一
さてピッパは踊る……一四二
畜伯クラムブトン……一四八

滯歐小品……一五六
廊下の女……一五六
白銀が岡……一六四
伊太利小景……一七三
序　詞……一七三
ミラノ……一八二
ヴエネチヤ……一八七
フイレンツエ……一九三
羅　馬……一九九
ナポリ……二〇八
ピザとヂエノヴア……二一七
自然と人と藝術（跋に代ふ）……二二三
表　紙　ホドラアの「選ばれたる者」に依る圖案（宇都宮誠太郎）……

夢作る人
見返ダンテ神曲地獄篇の挿繪（サンドロ・ボッティチエリイ）……四

挿繪目次

井リヤム・ジレットの「夢作る人」……（口繪）
一　リギ山上の日の出こ霧の海
　　リギよりベルン系アルプスを望む
二　*ネツカア河より城址を望む
　　ケエテの家（ハイデルベルグ）
三　*紐育の屋根裏住ひ（2）
四　*市俄古の家、*紐育リヴアサイドの或午後
五　ヤシヤ・ハイフエッツ、ジエラルデイン・ファラア
六　*ボストンの家、*ウエストボルン・テレエスの家
七　フリッツ・クライスラア
八　プリンセス・メリイこラセルズ子爵

夢作る人

ウエストミンスタア・アッベエ・
九 倫敦塔
一〇 巴里ノオトル・ダアムの怪物
一一 馬耳塞でカムボッヂヤの子供を寫生するロダン翁
巴里のロダン博物館
一二 ボッダムの離宮、グリユーネワルドにて
ワン湖の船頭ウエルレ君
一三 イエナの大學生、ウエルダアの櫻花と櫻酒
一四 伯林近郊シュプレエワルドの自然と風俗
一五 テユーリンゲンの夏(3)
一六 ワイマアルの「ゲエテ園邸」、同自然劇場
一七 ゲエテとシラアの柩、ゲエテ終焉の室
一八 ハウプトマンの塑像(クルト・クロオナア作)

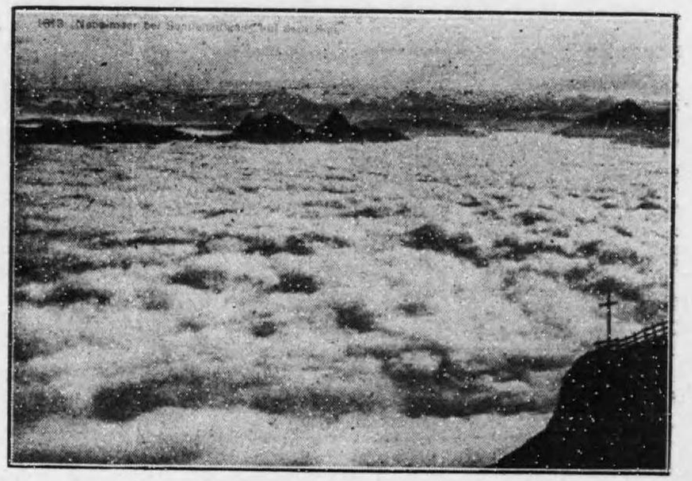
一九 ハウプトマン夫人と令息
自邸の前に立つハウプトマンと末子ベンヴエヌウト
二〇 獨立記念館(ブレスラウ)
「フロリアン・ガイエル」(ルウドルフ・リットナア)
二一 ハウプトマンの「鼠」(ヘエフリヒとフオン・井ンタアシュタイン)
「寂しき人々」(モイツシイとシユトラウブ)
二二 「獺の裘」(ヤンニングスとニイゼ)
「沈鐘」(伯林大劇場)
「さてピツパは踊る」(エツカアスベルグとヤンニングス)
二三 「殿者ヘンシエル」(ヘエフリヒとフオン・キンタアシュタイン)
二四 「畫伯クラムプトン」(バツサアマン)
「寂しき人々」のアンナ(エルゼ・レエマン)
二五 リイゼン山谷三景(山の宿、溪流、硝子工場)

夢作る人

二六 白銀が岡、畵伯の家、兩孃と女中と犬
二七 瑞西サン・モオリッツの雪景、同スケエト場
二八 ミラノの伽藍の屋蓋、スカラ座演劇博物館の古假面
二九 船から見たヴエネチヤ、水路、サン・マルコの廣場
三〇 リドの夏、嘆きの橋
三一 「縛められし人々」と「ダヴィデ」(フイレンツエ美術院)
三二 椅子に凭れる聖母(ラフアエロ)
三三 畵廊のかけ橋(ボンテ・ベツキヨ)、フイレンツエの伽藍
三四 フオーロ・ロマノの廢墟、聖アンヂエロとタイヴアー河
聖ツエチリヤの墓
三五 パラチイノの丘、コロツセオ
サン・ピエトロの屋蓋から見た羅馬市
三六 ミケランヂエロの「失樂園」ヴアチカン美術館

三七 ミケランヂエロの「最終審判」(ヴアチカン)
三八 サン・ピエトロの前庭、同復活祭の物賣女
三九 ポムペイの廢墟、ウエスヴイオの噴火口
四〇 カプリ島の瑯玕洞(グロツタ・アツヅラ)
四一 カプリ島風俗
四二 ピザの斜塔、同伽藍、カムポ・サント
四三 鄉愁が岡(瑞西インタアラアケン)、新嘉坡の護謨林
四四 提琴家イザエヒシユトラアスブルグの旗亭
四五 故國へ(諏訪丸)

【*印は著者又は同伴者の撮影】



リギ山上の日の出と霧の海

リギよりベルンアルプスを望む

ネツカア河より
城趾を望む

ケエテの家
（ハイデルベルグ）

歸朝に際して

（序に代ふ）

一

山の蔭に水あり、水の彼處に山ありて、
山のきは、水のほとり
靜かにも市は眠れり、
市の中に人は夢みむ、
嬰兒は母の胸に
惱みある者は傷ましき頬に
涙してしばしは忘るらむ
世のわづらひ、
見よ鈴振りて急ぐなり、

歸朝に際して

夢作る人

迷へる山羊も、
人にしてなぞ枕するこころなけむ。
夕霧につゝまれて我立てば
風は吹く飄々こわが髪を、
千尋の谷底に瞬きする燈火の
一つ一つ消えて行く
わが日の數か
遮莫悲しき思ひを棄て、
喜びて夕暮の歌をうたはむ、
わが裡にもこの山ここの水こ
盡る無き永遠の命宿れり。

ここし八月十五日瑞西のリギイ山巓に獨り立つてかう歌つた私は再會の喜びこ別離の悲みこを一つ胸に宿してすゞろなる思ひに耽る身であつた。歐羅巴の秋は早い。學都ハイデ

ルベルグへ歸つてみるこ公園にも街頭にも蕭條の氣が漂つてネッカ河の水は著しく痩せてゐた。「思ひ出」の舞臺面である「古ハイデルベルグ」の旅亭に休んで葡萄酒の杯を上げ、城址こ城山こ水の流れを眺めてるこ瑞西の長旅の疲れか秋風が身に喰ひ入るやうに覺えて何こなく物悲しく、限り無く淋しい。その日は八月末日でもう十日もすれば此處を引き上げ伯林へ歸つて旅裝を整へ、巴里を經て歸朝の途に上る自分である。

別れこなれば美はしくも懷かしアルト・ハイデルベルグ。ネッカア・ラインに比ひなき市こぞ歌はるゝ。山よ、水よ、碧き眼よ、さらば、幸く惠まれてあれ！

その昔佛軍の砲擊に依て毀たれた名城の廢墟を眼前に眺め、道行く男女の寢れた屈託顔を見るここの國の人のためにも胸が重くなる。

「古き橋」こ「城山」こ
「哲人の路」こ
眺めやれば
秋は來ぬ、祕やかに、嚴かに。

歸朝に際して

夢作る人

風は愁へ、樹は涙し
面窶れして人は行けり。
何が故にかくばかり
人は惱み
何が故にかくばかり
人は憎む、
見よ、水は流る、
喜びも悲しみも愛も憎みも
載せて流る、
絶間なく。

秋長け、冬が近づくと、草木は凋落し、焚く可き燃料も乏しく、この國の人々は飢ゑ凍えるであらう。懶さうに、蒼白い顔をして茫然坐つてゐる子供を見るのが何よりも傷ましい。——

豫感といふものがありとすれば、正しくそれであつたのであらう。その翌日卽ち九月一日の夕刊に約九千基米突（キロメートル）の距離に於て稀有の大地震があつた。當市の地震計に感じたところに依ると、メッシナの地震と同樣の强烈さで、破壞的（フェルニヒテンド）である。南米と日本とが問題になる、とあつた。「では、南米でせう」と私は下宿の主婦に答へたが少し不安を感じた。ところが二日の朝刊は「昨日六分間に亙る大地震が日本にあつて横濱市は殆ど全部破壞せられ、海嘯、火災が併發して東京も大被害を蒙つた」ことを報じた。吾々日本人は半信半疑で非常の不安に陷つた。三日の新聞に依ると宮城が燒けつゝある。十基米突（キロメートル）に亙る大火災が東京に擴がり、海嘯にさらはれた家屋も多く、横濱港では無數の船舶が沈沒し、東京、横濱市だけでも死者十萬を算する。富士山附近が最も强震で、その邊の都市町村多く破壞せられ、笹子隧道が崩壞し死者六百名、淺草の高塔も倒れたと云ふ。四日になると死者の數が東京だけでも二十五萬に上り、江の島は消滅し、東京以外十二都市が被害し、倒壞、流失燒失家屋無數、松方公は鎌倉で死亡し、高橋總理は三十の僚友と共に會議中壓死し、大學諸官廳、停車場（ステーション）、劇場其他苟も煉瓦造の家屋は悉く破壞したと云ふ。私達は唯、茫然と手

歸朝に際して

を拱いて、徒らに揣摩臆測するばかりだ。關西出の人々は私のやうに東京に家族や親戚を有つてゐる者を慰問して歩く。電報を打たうにも此處では當分受理されず、又その着否は頗る疑はしい。日本震災の損害約二百億萬圓で、日本は内部の整理に全力を傾注する必要上政治的には第四等國に落ちるだらうと云はれ、一方東京人は飢餓に迫り、某公園で踏み殺された老幼男女の數も多く、萬世橋ステーションへ避難して建物崩潰のため無殘の最期を遂げた不幸な人々が多數にある。箱根では生者の數が死者のそれよりも少い。米と水とが甚だしく缺乏し、死者の數は五十萬乃至三百萬だと報ぜられる。惡疫流行の說さへ傳へられた。

多少の誇張と誤報とを天引してみても日本に取つて殆ど致命的の打擊であることは疑ひを容れない、妻子眷族の生死は到底知る由も無い。道で識らぬ獨逸人から慰問を受ける度毎に却て不安が增して來る。こも角一日も早く伯林へ引き上げよう。

それにしても、昨日までは同情憐愍の對象であつた獨逸人が今日は寧ろ羨望の眼で眺められるとは、思へば不思議な運命の轉換である。窮してはゐても此國の人々にはまだ屋根があり、衣食がある。半ば飢ゑつゝも兎も角雨露を凌ぎ肌を蔽ひ、一片のパンと一杯の飲料とを得ることが出來る。日本に於ける幾百萬の罹災者の運命はどうであらう！

詠嘆的の眼を以て眺めるには餘りに切逼した事實である。詩も歌も無い。唯「故鄉無し、故鄉無し！」と吐息するばかりである

二

歸朝して落ち着かぬ身を强ひて落ち着けて、過去二年餘りの生活を回顧してみると、一番深く强い印象は、やはりこの日本の大災害の報知であつた。幸ひにして、一人も缺けぬ家族近親の顏を見ると胸は感謝の念で一杯になつた。

こもかく生きて歸つて來た。伸びる可き芽生は伸びて行く。老木の根はまだ堅い。他に何の望むところがあらう。

「哲學は鄉愁（ハイムウェー）である」と詩人ノヴァーリスが云つた。「人生は精神が自己へ復歸する無限の旅程である。」何處へ？と問はれて「常に家路へ！」と答へたのは「青い花」の主人公ではな

いか。私は歸つて來た。けれども眞の自己へ歸る日はまだ遠い。世界を一周して故國の土を踏み、故國の糧を喰みながら、依然として自分は迷兒である。よし、これから「自己への旅」に出かけよう。

市俄古、紐育、ボストン、倫敦、巴里、伯林、ハイデルベルグ、ブラッセルと時の長短はあつても多少腰を落ちつけた土地の印象は流石に鮮かである。中にも約一年半を送つた伯林の光景はまざまざと眼の前に見える。ついこの十一月五日に私は其處を去つて巴里へ移つたのである。極く近い處のやうに見える。一晝夜も汽車で駛れば着けるやうに思はれる。選帝侯街(クールフュルステンダム)の街路樹、記念教會(グデヒトニス・キルヒエ)の高塔、カフエー、レストラン、悉く眼裡に鮮かである。聽き慣れた露西亞音樂の響が耳底に殘つてゐる。自分の母の都市である東京の方が今は却て未知の土地、過去の國となつてしまつた。「死せる市」といふ言葉を想ひ出すさへ心細　傷ましい。この夏、瑞西山中、ルツエルンの郊外で一百年前山崩れのため岩石に壓せられ一村が全滅し、七百名の住民が犧牲になつたといふ遺跡を眺め、磊々たる石塊に當時を偲び無限の感慨に耽つたが、一箇月經たぬ内にそれに幾百倍した災害が故國の同胞を見

舞ふとは誠に夢想だにしなかつた。

さて、外遊二年間、何が最も深い印象を與へたかと云へば、それは羅馬のフォロ・ロマノの廢墟の間に萠え出た柔かい綠の春草である。ポムペイの殘骸を我物顔に領する蜥蜴の姿である。「永劫」といふ觀念をこれ程、切に感得したことはない。「自然」の威力と慈悲とをこれ程深刻に味はつたことはない。

燒け爛れ、いみ割れし
土地よりも
春來れば、はつかにも
柔かき若草の
萠え出づるらむ
あはれ、いみじくも
めでたき
大自然の力よ

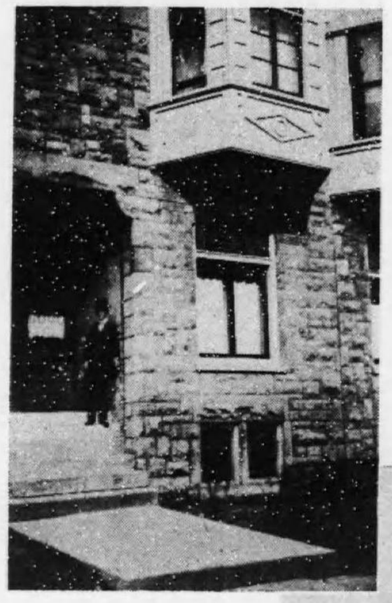
歸朝に際して

世界の文物に接して得た無數の印象も畢竟このカの發現の諸相に外ならない。そして、その力を宿す自己の心の前へ歸つて來て依然として解き難い謎に逢着する。これが「旅」である。

今や、西歐の人々は母なる東洋文化の根源に溯り、其神祕を探らうとしてゐる。之を藝術の方面に考へても、來るべき新しい物は果して何であらうか。今月下旬私達の船は上海に寄港した。私にとつては曾遊の地である。四年振りで來て見て、私は四年前の驚異を新たにした。生活にも藝術にも不思議に東洋と西洋との要素が混合してゐる。勿論可なり雜然と混合してゐる。ともかく歐米諸國に見られない變化がある。そして、何年振りかで、「梅蘭芳（メイランファン）」の技藝を佛蘭西租界の「共舞臺」で觀たとき、この混合が一種の調和となり、諧音となつて響くのを感じた。彼に於ては第一に兩性の不思議な混和がある。明眸皓齒媚を湛へて艶然と微笑するとき彼は正しく女性である。その優婉典雅の曲線に至つては誠に女性以上の美を備へてゐる。謠曲「海人」に似た新作「廉錦楓」の海底の場で演ずる「劍の舞」は男性のカと女性の美との微妙な融合であつた。幾度か更へられた絢爛たる衣裝の上にも不思議に東西兩趣味の錯綜と調和とがあつた。

復興、革新の春に際して吾々は生活の上にも一般文化の上にもより多くより深く隣邦を觀察する必要はあるまいか。支那と露西亞は東西文化の接觸融合の點に於て、頽廢の裡に潜む一種の底力に就て、最も私の興味と注意を牽く。單に「自己」の問題としても、この東西兩文化の調節は一大懸案である。何となれば、目前の外的生活の樣式のみを取つても、（或は恰もこの方面が）吾々の現在は餘りに蕪雜であり、沒趣味であり、貧弱である、論議の時は夙に過ぎた、吾々は實行の第一年に入らねばならぬ。

紐育の屋根裏住ひ



市俄古の家

紐育リヴァサイドの或午後

アヲヅラ・ヒゲヲ上ゲ

ツツエフネハ・ヤヒヤ

屋根裏より

船旅

一

大正十年十月十五日午後三時華府會議全權一行と實業團一行とを載せた我々の鹿島丸が横濱の埠頭を離れた。赤や青の無數の緣の糸が甲板から棧橋へと引かれて、「おさらばさらば」と無言の別れを告げる。それも一片の紙の薄く果敢ない名殘である。悲壯な樂の音が起り、溜息とも聞える汽笛が響き渡つて架橋が取り外され、巨大な船體が靜かに動き始めると、緣の糸はふつと切れて、行く人、送る人の姿が互に小さく、遠く、朧に幽かになつて、いつか水と空との間に消え失せる。

大阪のK君から宇治の花屋敷で餞別に贈られた雙眼鏡をはづして船房(キャビン)へ歸る。紐育のK君と神戸のドクトルとが同室である。當分これが我々の世界とあつて、船へ宛てられた書

簡、電報、數々の贈物などを整理する。M夫人から贈られた花束が永く日本の色と香りとを止めた。自分もドクトルも初旅の事であるから是から先きはすべて紐育のK君がたよりである。子供のやうになつて一々其教へを乞ふ事にする。一體今度の航海は全權久は實業團に無關係の者は成る可く乘せない方針らしかつたが、自分は餘程以前から船房（キャビン）を取つてあつたので、他の五六の人々と共に其中へ割込んだのである。嘸窮屈だらうと思つてゐた食堂は案外に極めて平民的で、晩餐の時にもT公爵を始め皆脊廣姿である。外國人は米國の新聞記者二名と其中の一人なる某氏の夫人とだけである。

去年の夏の上海（シャンハイ）行の經驗があるので、冬は難航路と聞いてゐるシアトル線も大した事はあるまいと高を括つてゐたが、矢張不可ない。晩餐後ハウプトマンの所謂「粘液性の怪物」が胸の邊へぬつと不氣味な頭を擡げて來た。慌てゝ白木屋仕込の"Sea Sick"を飲み込んでみたが間に合はない。ドクトルも蒼い顏をしてゐる。唯紐育のK君だけは「私はまた人に憎まれる程船に强いので」と名乘つて出た程あつて、ぴん〳〵してゐる。一寸憎んでみようかと思つたが中止して穴熊のやうに床に蟄居する事にする。好人物らしい小使（ボーイ）が慰め呉れる。日本の近海は浪の高いのが常である。二三日すれば慣れると云ふ。翌日も船房（キャビン）へ食事を運んで貰ふ。然しソシアルホールへは顏を出す。日本の婦人は實業團のK夫人と同じくM氏令孃だけである。大阪のK氏の令甥に當る事務長は「この位女氣の少い航海はありません」と眞情を吐露してゐた。

三日目は快晴、大に元氣を恢復して甲板へ出たり京都の實業家I氏の令甥を船房（キャビン）に訪問して氣焰を吐いたりした。氏は穴熊黨の雄なるもので一週間門外不出とあつて大に人意を强からしめる。「天晴れ氣分良し」と云つたやうな電報を日本へ打つ。紹介せられてゐる五六の人々にも刺を通じる。夜は活動寫眞があつた。米國の滑稽物である。說明の文句は「拙い英語だから分らない」事にする。上陸してからも言葉の通じない時には凡て先方が惡い事に極める。

想見嚴慈天上靈　嫣然相顧眼殊青
當年根岸寧馨子　今日文壇一將星
朝踏美山木温潤　夕探歐海水瓏玲

屋根裏より

夢作る人

期君撈採明珠玉

これは京都の王乗鷹翁の送別の詩であるが、西洋人が六づかしい事を云つたら「憚りながらこれが讀めますか」と突き付ける覺悟である。但自分にも讀めない字はあるのだが、意味はよく理解してゐる。Halloo, All right, Sure, Thank you の世界へ入つてみると、漢字の有難味が一層よく分る。米人が雄辯に何か喋舌り立てる場合には"Oh, is that so?" といふK君から敎はつた唯一の武器で受け止めて、何か外の事を考へてゐる。さうすると仕舞ひには根負けがして向ふで止める。尤もこんな風では何時まで經つても會話の進歩しない事は請合である。

二

兎も角船は日本船であり、乘客も九分五厘まで日本人だから氣が強い。甲板球突(デッキビリヤード)や『點取り』なども彌次つて盛に虛勢を張る。この船には上海(シヤンハイ)の歸りに乘つた事があるので、多少ファミリヤの氣がする。「長崎情話」を聞かされた理髮師君も健在である。そしてK君は大元氣、事務長が又痛快極まる人物なので大に賴もしい。一方若いI君が依然として船房(キヤビン)を出ないのが消極的に勇氣を添へる。

M孃のピヤノを聽きながら茫然ソシヤル・ホールに坐つてゐたり、頭の具合が怪しくなると無暗に甲板(デツキ)を歩いたりする。ドクトルが同室だから安心である。尤もこの人は「自分自身の患者」になる場合が多いのではあるが——

然し、船中第一の活動家は「プリンス」である。喫煙室、ソシヤル・ホール、甲板と、到る處に出沒して、デツキビリヤードなぞにも加はり、誰に對しても舊知の如く談笑する。一方、K全權は何か沈思してゐるやうに默々と痩せた長軀を甲板(デツキ)に運んだり、ぢつと圍碁に見耽つたりしてゐる。實業團の人々は事務所を置いて、不絕電報を打つたり、タイプライタアを用ゐたりして忙しさうである。記者團の中で「穴熊」と綽名せられた人は一週間蟄居して、船房(キヤビン)から眼を光らせ天下の形勢を嗅ぎつけようといふ頗る横着な態度を取つたさうである。

十七日、滿月の夜、甲板(デツキ)を逍遙して、始めて旅情ともいふべきものを味はつた——

屋根裏より

旅の世の旅に出でて
波の身の波に漂ふ
わが微笑とわが涙とを
月影よ載せて流れよ
遙なるわがふるさとへ——

けれども自分達は大抵笑ひ興じてこの荒い航海を過ごした。恐ろしい風と浪と飛沫との中を京都のI氏と腕を組んで號令をかけながら甲板を濶歩した事もある。船が傾いて危く倒れさうになりつゝも勇氣を鼓して無暗に歩いた。その朝数命端艇への乘客配當表が掲示せられたのであつた。自分達は「プリンス」を中心に全櫓一行の事務室で「草紙洗」と「三井寺」とを謠つた。「プリンス」の實生流とM氏の喜多流とが最も光つてゐた。謠ひながら前後へ倒れさうになる事が度々あつた。

二十日の夜から二十一日へかけて未曾有の大暴風になつた。蹌めきながら用を達しに行つて、恐る恐る外を眺めると、土手のやうな大浪が押し寄せて來る。丁度張子か何かで作つたものゝやうに堅く實體的の感じを起させる。息が詰るやうな烈風である。然し幸に積荷が輕かつた爲に船が水を冠る虞は少かつた。船橋に立つた船長は毛髪が根元から吹き拔かれるやうに感じたと云ふ。二十年の航海中最初の經驗だと云つた。庖厨に働いてゐたコックの一人は上から重い鍋が落下した爲に幾針か縫ふやうな負傷をした。自分達のトランクやスートケースは一方から他方へ自働的に往來した。食卓には無論框が入つたが、椅子が壞れてその機勢に或紳士はフォークとナイフとを持つた儘で向ふの壁へ飛んで行つたといふ珍談もある。自分は自然の威力に對して敬意を表するため船房へ引退した。船に多年の經驗のある人々の中には内々端艇へ乘る時の用意をしたのもあつたさうである。この荒海に木の葉のやうに漂ひ、猛烈な寒氣に遭つては勿論助かる見込みはないが、どもかくも命の續く限り遁げてみようと思つたのであらう。そこへ行くと初旅の自分達は「かういふ事もあるのだらう」位に思つて、多少自暴氣味だつたかもしれないが、悠然と構へてゐた。十日位は水ばかり飲んでも生きてゐられるだらうと語り合つた。然し暴風が煙突を掠めて、非常信號のやうに物凄い嘯きを發する度毎に流石不安の眼を光らせずにはゐられな

かつた。

この大暴風雨の中でもK君だけは不相變食堂へ出たり、ブラウニングの詩を讀んだりしてゐる。かういふ人は間違つて陸上動物に生れて來たのであらう。颶風圏を脱する爲めに船長の英斷で吾々の船は半日以上も日本へ向つて逆航したのであつた。「今に横濱へ着くだらう」などと氣樂な事を云つてゐたが、船長の苦心は察するに餘りある。舵機の一つに故障を生じたとも聞いた。

三

翌日は晴れて風も大分靜まり、乘客は俄に元氣を恢復した。三十年來の難風に遭遇して無事に切り抜ける事が出來たのであるから三鞭(シャンペン)を抜いて祝しても可いわけである。昨夜十二時から船は再び米國へ向つたのである。自分も「羽衣」のシテと「蟬丸」のツレとを謠つた。

「廿三日」が二度あるといふのは不思議な事だ。時計の針を進めて行くといふのも妙な氣持がする。然し、どんな眞似をしても「時(タイム)」の力には抵抗し得ないのだ。暦がどんなに組立てられてゐても、針がどう動いても、吾々の生命が秒刻に縮まりつゝあるといふ事實を聊かも變更することは出來ない。大自然の中へ入つてみると人間の小さい事が一層よくわかる。現に昨夜は手鞠のやうに風波に翻弄せられたのだ。

自然の威力、海の神祕といふやうな事を中心として自分は食堂で一場の講演を試みた。三井のY氏に頼まれて斷り切れなくなつたのだ。航海中、政治、經濟、軍事等の各方面に亙つてそれ〴〵專門家の談話があつた。自分は其間に挾まつて毛色の變つたところを少しばかり述べたのである。浪漫派の異國情調、イブセンの描いた北海の氣分、ハウプトマンの「アトランティス」、ワグナアの「さまよへる和蘭人」などに就いて語つた。「我心似海、胸底藏明珠」とはハイネの詩に因んで自分が某氏の書藻帖に誌した句である。

それにしても絶大の自然力に打勝つて、終に二十九日の朝、自分が同船の人々の前途を祝して戯れに「勝利の港」と名づけたヴィクトリアの波止場(ウォールフ)に着いた時には流石に人々の顔に安堵と喜悦の色が浮んでゐた。是より先き三日に亙つて種々の意味に於て三鞭(シャンペン)の杯が

擧げられたのであつた。K全權が三十餘年前白面の一書生として帆船に乘込み、殆ど吾々の船が遭遇したのと同一の場所で大暴風雨に苦しめられたといふ回想談をして、今度の航海に於ける船長の苦心に同情し、又狂瀾怒濤の間船體の動搖甚だしき際にも一回も冷肉を供せられなかつた事實を擧げ、幾多の危險を冒して忠實に職務を遂行したスチュワード等を賞揚したのは最も吾々の同感を呼んだ。吾々は心から杯を擧げて赭顏痩軀の船長に對して感謝の意を表したのであつた。更に自分は魁偉な相貌と小兒の心とを結び付けた事務長と全世界に於けるスタムプの總種類の凡そ半に相當する約一萬七千種を蒐め得た温厚篤實の機關長に對しても敬意を表しなければならない。

シヤトル

案外に綺麗な往み心地のよささうな處だ。殊に「綠湖」（グリイン・レエク）邊の秋色は丁度琵琶湖から瀨田川邊の趣があつて、日本を出てから、始めて秋らしい氣分を味はふ事が出來た。ワシントン大學の位置も非常に好い。「新入生」（フレッシュマン）が綠の帽子を戴いた若々しい姿を紅葉した校庭の並木道に現すのも趣がある。活氣に滿ちた女學生が華やかな裝ひをして連れ立つて歩いてゐるのも清新な感を與へる。「男女共學」（コオ・デウケーション）は日本に於いても畢竟「時」（タイム）の問題でなければならない。圖書館の自由開放主義も學ぶべきだ。學問としての權威如何は別問題として學生の間に潑溂な氣が充ちてゐる點は羨ましい。

英文學の教授に紹介せられたのは好いが、華盛頓會議の事を訊ねられて一寸狼狽した。獨逸語の先生は極めて温厚な人であつた。獨逸文學專攻の學生は餘り無いやうである。日本の學生の爲めに在留の邦人が醵金して綺麗な寄宿舍を作つてあるのは嬉しかつた。此處でも總て紐育のK君の世話になつて「カフエテリヤ」（カフエテリア）の案内までうけた。自分で盆（プレエト）や、ナプキン、ナイフ、フォークまで揃へてごうごう巡りをして喰物を取つて來るのは餘り好い圖ではないが、必ずしも下等の人種が集まるのでなく、恐ろしくつんと構へた米國の叔母さんなどに給仕して貰つて、一々「プリーズ」とか「サンキュー」とか云はせられておまけに若干かの心付（チップ）を置き、ほつとして立ち上がるより、この方が氣樂で宜い。市俄古（シカゴ）ではよくかうした「自分給仕」（セルフサアヴイス）をやつたものだ。日本でもそろそろ始めてもよさゝうなも

のだと思ふが「食事」を一つの趣味として「手盛り」を食客の運命と考へる吾々には一寸向かないかも知れない。況や市俄古なぞにある「自働式食堂」とかいふものは、一錢人れて一生の運命を知らうと云ふ自働式辻占ひの花主以外には一時の慰みとしてより以上の價値は認められないであらう。凡て生活の機械化といふ事が殆ど極端まで行はれてゐるのは米國である。今に孵卵器の樣なもので赤ん坊を製造する時期が來るかも知れない。現に或州立病院の産科では生兒に番號をつけて育雛器の樣な處へぎんぎん送つてゐるさうである。時々他人の子と間違へられる虞がありさうだと見て來た人が語つた。

市俄古で大學の社會學の學生と一緒に鐵工場を視察したが、灼熱せられた巨大の鐵材が飴の樣に自由自在に料理せられる處を見ると鐵ながら何だか可哀相な氣がしてならなかつた。あれが生物では到底堪らないと思つて、有名な「屠牛場」は誰が何と勸めても斷然見物しない事にした。何ほ何でも餘り馬鹿にしてゐる。「マアシャル・フィールド」といふ箆棒に大きいデパアトメント・ストワアも一寸通り拔けてみたが、あれでは往來を仕切つたやうなもので、家屋らしい感じを與へない。「三越」位が丁度宜いのだ。物には方圖といふものがある——かう獨りで憤慨してみても何にもならないが、序に自働車の横暴に就ても一言して置かねばならない。

試みに「忙しい時間」に市俄古のミツシンガム通りを横切つてみるが宜い。慣れないものには全く命がけの仕事のやうに思はれる事であらう。成程巡査の合圖を持つて團體的に通過すれば無事であらうが、土曜日の午後とか、日曜なぞにはその取締りも餘り行屆かない。殊に夜間雨でも降つてゐたら危險は一層增すのである。現に霧の深い夜、シャトルの或街上で米國の老婦人が轢死してゐたのを翌朝まで誰も知らずにゐたといふ例もある。かういふ變事は毎日數多く繰返されつゝあるのだ。大抵の場合運轉手は後難を虞れて知らぬ顏の半兵衞で走り去つて仕舞ふ。これも市俄古の上町で起つた出來事だが、十三人の男女（不吉の數ではあつた）が街上で電車を持ち合はせてゐると突然電車の後から自働車が現れて、其群衆の中を突破した。三人程即死し、他も重輕傷を受けた。自働車はそれに構はず疾走し去らうとする、巡査が短銃を十發まで放つたが無駄であつた。實に野蠻極まる話である。自分は下町へ行くと何時も戰線へ出てゐる心持がした。用心すれば過失は

少いとしても、あゝして不絶不安な狀態に置かれるといふ事は極めて不愉快だ。云はゞ猛獸の中を人間が歩いてゐる樣なものだ。尤も道が分らなくなるといつも自分はこの「猛獸」の厄介にはなつたが、いくら世話になつても「獸」は矢張「獸」である。これ等は「文明の野蠻」と云はねばならぬ。市俄古では早晩巨費を投じて、徹底的に交通機關を整理し、往來安全を圖るさうだが、それは當然の話である。シヤトルでさへ、十人に一臺の割合で「猛獸」が飼はれてゐるさうだ。紐育は中心(センター)の區域が廣いので、市俄古程雜沓しないが、それでも目貫の通りは自働車で身動きもならない事がある。如何にも人間を馬鹿にした話である。

最後に「ホールド・アップ」が來る。これも米國「文明」の暗黑面の一つである。市俄古へ入るとすぐに大分嚇かされたが、これ等辻强盜の被害は想像以上に夥しいものらしい。白晝熱鬧裡に於て、いきなり短銃(ピストル)を突きつけられる事が屢々あるさうだ。或邦人は紐育の圖書館の便所で脇腹へ銃口を當てがはれたと云ふ。又「タキシー」の運轉手が居直る事もある。よく人に注意される事だが、往來で「時間」を訊かれたり「燐寸(マッチ)」を貸せと云はれても相手にするなといふ事である。一寸でも隙を見せると、いつの間にか銃口が腹部あたりへ當てがはれるのである。だから金を携帶しないに限るが、さうかと云つて無一物だと「骨折損をさせやがつた」と云ふ腹癒に横面を手ひどく張り倒す、二三人寄つて半殺しにするさうである。結局外出する時には强盜君に對する適當の租稅を懷中する必要があると云ふ。馬鹿な話だ。中には度胸の据つた日本人があつて、横面を御見舞申されたときに泰然として「有難う、僕は無一物だつたが君に一つ頂戴して御蔭で金持ちになつた」と云つたさうだが、誰も見てゐなかつたのだから餘りあてにはならない。「ホールド・アップ」もクリスマス前になると餘程猛烈になつて大仕掛に商店を襲つたり、汽車を止めたりするのがある。よく活動寫眞でやるやうな光景が實現せられるのだ。自働車を奪ふために二人の男を縛つて地下室へ引曳り下ろし、槌で撲り殺したといふやうな慘劇さへ演ぜられたと云ふ。概してかういふ殺伐な風は黑人や伊太利人などが無數に住んでゐる市俄古に一番多いやうだ。殊に工業地であるから、失業者何十萬といふことになると自から危險狀態を生ずるのである。そしてかういふ辻强盜が捕縛せられたといふ例は極めて稀有な事に屬す

る。その辯警官の數は非常に多く、いづれも精巧な短銃を携へてゐるのであるが、義務觀念が日本の警官のやうに發達してゐないせいもあらうし、一方の强盜の方も必ず短銃を持ち多くの場合幾人か組になつてゐて巧に自働車を利用するので、容易に捕へられないのだ。且日本のやうに善い意味の「彌次馬」が集まつて警官に力を添へるこいふやうな事は殆ど絶無らしい。それほど個人主義が發達してゐるのだ。兎も角世界第一の富强國こ呼ばれる米國の都會生活が、今や塗炭の苦しみを嘗めつゝある獨逸のそれに比して一層不安だこいふ事は「文明」の恥辱こ云はねばならない。

市俄古

市俄古に就てはもう書く事がなくなつた。名物の「屠牛場」も見ず、其他大仕掛けの場所は大抵失敬したので餘り材料が無い。大學の事でも少し書かう。

「ゲエテの詩」こいふ題目の講義を傍聽した。聽講者十二名の中、十人迄女學生であつたのに驚いた。その中には五十歳位の老婦人もゐて、教授の質問に對して子供のやうに手を擧げて應答してゐた。獨逸系の婦人が多いのであらう。猶太の血が多く交つてゐる事は確だ。皆獨逸語を流暢に語る。初歩の文法の時間には禿頭の紳士まで交つて、聲を合はせて簡單な文章を鸚鵡返しに繰返してゐた。凡てが「問答（デイスカツシヨン）」の形で運ばれて行くのは有效だこ思つた。但、深く思考する時間は與へられさうでない。筆記萬能主義は勿論弊が多いこ思ふが、問答一點張りも考へものだ。「講義」に「演習」の要素を加味したならば適當ではないかこ思ふ。尤もそれには教授の數を增して、生徒の數を制限する必要が起るであらう。

學生劇を觀る。シユニツツラアの「活ける瞬間」を英譯でやつた。役者は皆相應に上手だが、扮裝が純米國式なのには困つた。當夜の呼物は「三味線の絲（ストリング、オブ、サミセン）」こいふので、女主人公が例の「キモノ」を左前に着て、花簪を挿して現れたのには閉口したが、然しこの役に扮した少女は不思議に日本的の印象を與へた。觀てゐる内に漸々「日本の女」らしく思へて來て、其思想感情の中へ引き入れられて行つた。筋は「袈裟こ盛遠」の契機（モティーフ）をモディファイしたやうなものであつたが、盛遠の役に當る男が「平民」を代表し「都一中」式の

盲目の藝人に假扮して、敵と附け覘ふ「武士」の家庭に入り込み、其妻の愛を得て、後に正體を現し、良人の命を要求すると、妻は義理と愛着との葛藤に苦しみ、結局良人の身代りになつて男の手にかゝつて死ぬ。白無垢を着て黒髪を解き、良人の臥床を死の床と觀念して徐かに身を横へる若い妻の顏を黎明に近い月光が照らす。凄婉な場面である。側光(サイド)が極めて有效に用ゐられた。「盲目の藝人」の寂しい心持もよく出てゐた。ハアヴアド大學でも「羽衣」を演じたといふ。其寫眞が「演劇」といふ雜誌に掲げられたが、「シテ」が妙に首を傾けてゐるのは可笑しい。それに囃方が柔道の稽古衣のやうなものを着て、肩を怒らしてずらりと並んでゐるのは滑稽至極である。兎も角「日本」は今や米國人の興味の中心となつてゐる事は確かだ。華盛頓會議の記事でも「日本」の名が劈頭に大々的に誌されてゐる。餘程日本を恐れてゐると見える。

市俄古は丁度「グランド・オペラ」の季節(シーズン)に入つて、カルーソーの後繼者と云はれるやうな人が舞臺に現はれるとあつて、是非觀たいと思つてゐたが、こう〳〵出發迄に席が取れなかつたのは遺憾千萬であつた。然し紐育で早晩觀られるといふ事で樂みにしてゐる。

その代り、リヒヤアド・シユトラウスのピヤノとエリザベエト・シユーマンの最高音(ソプラノ)を聽いた。丁度フォッシュ將軍歡迎の大行列があつて廣道(ブールヴアール)は非常な雜沓であつた。其中を「オーデイトリウム」で靜かに「エレクトラ」の作曲者の音樂を聽くといふのは不思議な對照(コントラスト)であつた。六十歳に近いこの獨逸の樂師は極めて謙遜な態度で舞臺(ステージ)に現はれた。エリザベエトの聲は銀を溶いて流すやうに優しく澄んでゐる。シユトラウスの小曲を網羅したこの「リサイタル」は自分に深い感銘を與へた。

無數にある「ヴォード井ル」とか「ショウ」とかいふものは愚劣極まるものであるが、米國人の趣味にはよく適合してゐるやうに見える。一日の業務に疲れた頭腦を休めるには恰好の代物だ。映畫、輕口、舞踏、手品、輕業、禽獸の藝、音樂と云つたやうなものを取りまぜてやる。日本の寄席より更に雜駁なものだ。然し紐育の「ヒッポドローム」を始め「シカゴ座」や「チヴォリ座」などの屋臺は素晴らしいもので、映畫とオーケストラとの微妙な調和には感服させられる。「キネマ・ミユージック」といふのであらうが、是れは辯士の說明とは決して兩立すべきものではない。日本で之を試みる場合には是非とも「辯士」

を除かなくてはならない。非常に微細な音響――誇大して云へば針の落ちる音まで樂器で描き出すのである。一方に辯士が蠻聲を張り上げてゐては到底翫賞する事が出來ない。但かうした「描寫的音樂」が上乘のものだといふのではない。自分としては寧ろ「舞踏劇」とか「氣分劇」といふものに音樂を用ゐて、其の情調を出すのに努力すべきだと思ふ。これが第一の「キネマ・ミユージック」で、次に寫實物には映畫と有機的に結び付けた音樂を用ゐて、中間に簡單な說明文を挿入するが好い。更に萬一イブセン劇の如きものを映寫する場合、卽ち臺詞が劇の生命の主要素となつてゐる場合には、自分がこの夏伊豆の伊東で觀たものゝやうに、男女の辯士を置き、脚本朗讀法に基いて主な役々を分けて眞面目に臺詞（せりふ）をつけさせるが宜い。

活動寫眞を發達させる方法として自分はこの三つの道を擧げたいと思ふ。第一の「情調」を出す試みとしては、米國では有名な「詩句」を映出し、風景を點出し、オーケストラで之を活かす方法を取つてゐる。これは極めて好い印象を與へる。何しろ第三流位の小屋にも「パイプオルガン」が二臺位備へてあるのだから驚く。自分は米國へ來て始めて本眞のパイプオルガンの音を聽いたのである。

二

市俄古の「中央劇場（セントラルスイヤタ）」でガルスウオーシーの "Skin Game" を觀た。米國へ來て始めて芝居らしい芝居を觀たのだ。そして非常に面白かつた。英國俳優の一團であつた。劇場も有樂座式の小じんまりした氣持の好い小屋で、落ち着いて見物する事が出來た。テキストを讀んでゐなかつたので勿論十分理解する事は出來なかつたが、それでも大體の筋は解つた。俳優はそれぞれ皆上手に見えた。日本語でも使つて呉れると臺詞廻しの批評も出來るが、英語では敵はない。批評家の說に依ると Hillcrist 及其夫人が「英國」の貴族主義を代表し、Hornblower といふ成上りの富豪が「獨逸」で、ホルンブローワーに追ひ出される Jackman 夫婦が「白耳義」だと云ふ。初めホルンブローワーが土地を買ひ占めたとき小作人はその儘安住させるとヒルクリストに約束したのであるが、今や工場を建てるに就て職工を入れる家屋が必要になつたので、止むを得ず立退き料を出して、ジャックマンに退

去を要求するのである。ヒルクリストは彼の食言を責める。ホルンブローワーはヒルクリスト一家の者が門閥を誇つて自分の家族と交際することを避けるばかりか、土地全體の者も自然に彼を疎んずるのを無念に思ひ、益金力を利用して事業を擴張し、新たに土地を買收して工場を建てようとしてゐる。若し其處に煙突が幾つも作られたらヒルクリスト家の誇りとしてゐる美しい眺望は全然破壞せられるのである。妥協の道は、唯ヒルクリストが節を屈して成上り者の彼と交際することを承諾するか否やにある。然し、ヒルクリストは飽迄かの「食言」の一件を楯にとつて之を拒む。茲に所謂「スキン・ゲエム」(Skin game)なるものが始まるのである。「スキン・ゲエム」といふ意味はよく解らないがホルンブローワーの言葉に "A skin game without gloves on" とあり、又ヒルクリストの言葉に "We do it to save our skins" とあるから「眞劍勝負」、「命がけの戰ひ」といふやうな事であらうか。一番の策士はヒルクリスト夫人であつて、極めてプライドの高い、冷靜な英國の上流夫人を代表してゐる。夫人の鋭い眼がホルンブローワーの嫁の暗い過去を看破する。彼女は目的の爲には手段を擇はずといふ態度で、裏面から活動して此「ゲエム」に勝を制しようとする。

そして美事に成功する。然し其結果は一人の女性とその胎内に宿る無辜の小さき生命とを危殆に瀕せしめるのである。ヒルクリストは「ゲエム」には勝つたが、其手は最早「清く」はない。ホルンブローワーの喝破した「僞善者(ヒポクリット)!」と云ふ言葉が彼の耳の底にこびりついてゐる。——自分はまだ十分この劇を研究してゐないから、果して批評家の云ふ「英國」對「獨逸」の葛藤並に「白耳義」の運命が暗示せられてゐるかどうか斷言は出來ない。恐らく作者は之を否認するであらう。さういふ寓意無しに考へても興味の深い作である。殊に各の個性が極めて鮮かに描き出されてゐる。自分に取つて特に印象の深かつたのはヒルクリストの若い娘「ジル」(Jill)である。「新時代」を代表する女性とも見る可き型で、イプセンの「ヒルダ」にも比すべき、男性的の、活潑な、美しい少女である。この役に扮した女優は最もよく其人柄に一致してゐた。眼と皮膚と聲の極めて美しい人であつた。暗い過去を持つた身重の嫁のヒステリカルの煩悶もよく演出せられた。彫像のやうに冷靜なヒルクリスト夫人も成功であつた。今迄寄席藝人ばかり觀せられた自分はこの劇を見物して心からの喜悅を禁じ得なかつた。神戸のK氏の親友であるドクトルM氏も非常に昂奮してゐる

屋根裏より

た。この人は社會問題に深い興味を持つてゐる快男兒である。

Cabaret といふものも「無酒精(ドライ)」では一向はづまない。市俄古モリソン・ホテルの地下室に「テレエス・ガアヅン」といふ一流のキャバレーがあつて二度ばかり行つてみた。半圓形(フィテヤタ)式に出來てゐて、氣分は頗る好いが、流行の「氷滑舞踏(スケーティングダンス)」一點張りでは有難くない。女や男が獨樂のやうに廻つたり、男が女の身體を宙に吊るし上げてぐるぐる引き廻したりする。要するに淺草の玉乘式のものである。「酒無くて何のおのれがキャバレかな」といふべきであらう。酒と云へばシャトル邊へはカリフォルニヤから飛行機などを利用して盛に密輸入してゐるとか聞いた。自働車のタイヤの中へウ井スキーを一杯つめて持つて來た事もあつたさうだ。併しともかく表面だけでも禁酒令が可なり嚴重に勵行せられつゝあるのは感心だ。勞働者などもおとなしく「ドライ」でゐるのは日本では想像も出來ない。

「婦人」の勢力が背後に隱れてゐることゝ思はれる。

獨逸人が大部分を占めてゐるといふ「ミルウオーキー」(Milwaukee)へ單騎で出かけてみた。靜かな好い市だ。此處の「ダウンタウン」には餘り「猛獸」は跋扈してゐない。氣が大きくなつて、ホテルに着くとすぐ街へ飛び出して、ある曲り角を折れると「土耳其風呂」の看板があるので、好奇(ものずき)に入つてみる。地下室で眞裸の壯漢が立ち現はれたのにはぎよつとした。貴重品は凡て預かるといふので身代全部をブリキの箱へ入れて仕舞つた。そして奥の臥床(ベット)のある處へ連れて行かれて、こゝで裸體になつて風呂場へ來いと云ふ。流石に少し不安になつて來た。全で案内を知らない土地へ來て、いきなり怪し氣な地下室へ閉ぢ籠められたのだから、これは餘り突飛に過ぎたかなと思つた。硝子の箱へ入ると四方八方から無數の電球が出てゐて無暗に熱い。汗が出て來る。「電氣死刑」にでもあつては助からない。三助の人相も頗る好くない。入墨(いれずみ)などをしてゐる。汗を取ると、今度は「シャワー」だ。火責め水責めといふ體裁で、どうでもして呉れとすつかり度胸を据ゑる。三助君が頻りに話しかける。獨逸猶太(ジヤマンジユー)種らしいが獨逸語は話さない。盛に日本を褒めて、今にメキシコと日本が強くなつて米國と戰爭をして勝つに相違無いと云ふ。日本人は正直で、平和的である。紐育には自分の親友の日本人がゐる。體は小さいが日本人はえらいと云ふ。「尤もだ！」と答へておいた。そして按摩(マッサージ)やら何やら種々の事をやつた後でやつと無罪放免にな

つて地下室を飛び出した。かう褒められてみると多少心付(チップ)をはづまざるをえない。其夜或劇場へ入つたら「さゝき」とかいふ日本人がオーケストラの「春雨(はるさめ)」にあはせて「角兵衛獅子」の扮装(いでたち)で踊つた。「日本の太鼓踊(ジャパニース、ドラムダンス)」といふのである。美しい米國の「バレー」の娘達の間へ交ると遺憾ながら頗る不恰好に見えた。もと「獨英學校」と云つた「ミルウオーキー大學」へ行つて獨逸語の教授と語る。教授の一人は維也納の生れで、シユニツツラアの事などを話した。東大の教育學のY博士が戰前訪問したといふ記事を載せた獨逸新聞の切抜きを見せた。自分は此(こ)校へ來た第二の日本人だと云ふ。ワシントン公園あたりの晩秋の景色は靜寂を極めたもので、頗る氣に入つた。もう二日ばかり滯在すると「ウ井ルヘルム・テル」が觀られたのだが、獨逸へ行けばと思つて割愛した。

紐育（グリーン井ッチ・ヴィレージ）

ナイヤガラは時間の都合でS博士の所謂「ナイヤガラ自働車なぞで來やあがら」をやつたので餘り深い印象を殘さなかつた。「氷結したナイヤガラ」を見るにはまだ餘りに時期が早すぎた。瀑布そのものは成程壯觀ではあるが、周圍がドライで調和した氣分を起させなかつた。もう少しゆつくり見物しなければ鑑賞は出來ない。

さて、紐育へ來て「屋根裏生活」を始めようとは思はなかつた。初め十日餘りは上町(アップタウン)にゐたが、銀閣寺のS博士から聞いてゐた「ワシントン・スクエア」へ行つて「ベッバア・ポット」といふ地下室のレストランで「蠟燭」の氣分を味はつたり、「バガン」といふ書肆で版畫や獨逸の古本を買つたりしたのが緣になつてこうこう郵船のN氏の世話で自分も「村の住人(ヴィレージャア)」の一人となつたのである。恐ろしく汚い部屋で最上階だ。「アティック・フイロソファー」だと京都のT君が云つたが、此處なら首を縊つても三日位は知れずにゐさうだと思つた。併し、此處の住民は大抵美術家、音樂家、文士なぞで維也納から來た閨秀畫家(アトリエ)と云つたやうな人が畫室を持つてゐる。美しいピアノの音も洩れて來る。周圍には「綠の魔(グリイン、ヤ)女(ワチ)」とか「青い馬(ブリユーホース)」とか「黑猫(ブラックキャット)」とか「鼠の艮」、「海賊の巣窟(パイレット・デン)」「ラ・ボエーム」と云つたやうな物凄い名のレストランや喫茶店が無數にあつて、舞踏なぞも盛んである。小劇場も二三ある。この邊は、昔は繁華な處で生粋の紐育兒が住んでゐたといふが、今も出入

する人物が大抵中流以上、少くとも文藝に趣味を持つ男女が多いやうである。「メエゾン鴻巣」とか「ろしや屋」とか云つた風の家や、「小品堂」とでも名づくべき氣の利いた往々悪くひねつた店が多い。「アンの店」、「ソニヤの店」なぞは恐ろしく凝つたものだ。此處も「ドライ」のお蔭に昔程面白くはないやうだが、それでも「無禮講」で行けるところが嬉しい。尤も自分はまだ一向不案内なので到る處で失敗して來る。「三歩下へ」といふ「カフエテリヤ」へ行くと、お斷りを喰つて、結局「六歩」で退却した事なぞがある。この村の事を書いた厚い書物があるが、それを買つて讀む程まだ興味を持ち得ないでゐる。ともかく米國で有名な詩人や美術家が此處に住んでゐた事は確かであり、今もさういつた人々の巣窟になつてゐるらしい。

併し屋根裏に於ける最初の一夜は頗る悲慘なものであつた。南京蟲といふ苦手が無數に襲來して全身十數箇處の痛手をうけた。いくら「家根裏の哲人」を氣取つてみてもこれでは助からない。N君に談判して貰つて翌日から一階下へ移る事にした。けれども汚い事は一向變らないし、氣分が屋根裏式だから、この記事は「屋根裏より」と名づけた。こゝへ越して來る前日に「メトロポリタン座」でプッチニの「ラ・ボヘーム」(La Bohème)を觀たのは不思議な暗示であつた。丁度これから入らうとする世界が舞臺の上に展開せられたのである。アルダ(Alda)の扮した「ミミ」(Mimi)は非常な好評であつた。肺を病む美しい少女が屋根裏のやうなところで息を引き取る場面は涙を催させた。周圍には貧しい詩人、音樂家、畫家、哲學者なぞがゐるのであつた。

ワグナアがこの季節から復活したのは自分にとつて大きい喜びである。自分は「パルシファル」を觀る事が出來た。こんなに莊嚴な幽寂な舞臺を曾て觀たことがない。そして魔法師クリングゾールの「魔城」の場面は妖艶と蠱惑とに滿ちてゐた。「クンドリ」に扮した女優は豐麗な肉體と美しい聲の持主であつた。觀客は寧ろ敬虔な態度でこの「復活したワグナア」を迎へた。今週は更に「ワルキューレ」を觀る筈である。「パルシファル」は英語で演出せられたが、今度は獨逸語である。俳優も一層優秀だと聞いてゐる。これ等の感想は更に次の機會を待つて誌すことにする。ヤシヤ・ハイフエッツの音樂も聽ける筈である。ファラア、三浦環夫人なぞもゐる。シヤリヤピン、シユトラウス、イザエと送迎に暇が

無い位である。併し「早川雪洲」なる人の人氣は全く素晴らしいもので、瑕夫人の比ではないといふことだ。「早川」、「熊谷」、「清水」と云つた名前で日本が代表せられてゐる觀がある。

南京蟲に血を吸ひ取られても幸ひに自分は壯健である。當分首を縊る必要もなさゝうだ。クリスマスが近い。外國でまた一つ齡を取る。終りに京都から來てゐる若いT君に送つた川柳を添へておく。日本でもダンスが盛んだと聞く。

Fぬきの FOX・TROT なごもやり。

（X－11X－13）

夢作る人

（ボストン）

一

井リヤム・ジレットの「夢作る人」（The Dream Maker）を紐育とボストンとで都合二度見た。劇そのものは例のシャーロック・ホルムズの復活とも云ふ可き探偵物で、藝術的價値に乏しい物ではあるが、ジレット其人の技藝に心を牽かれたのである。若い妻がブラックハンド流の惡漢の罠に罹つて一夜恐ろしい脅迫に遭ひ殆ど氣も狂はんばかりの苦悶に陷るのを、其亡き母の昔の戀人たる老ドクトルが敏腕を揮つて事件を處理し、其夜の經驗を一つの惡夢と思ひ込ませ、一方辛辣の手段で惡漢共の計畫の裏を掻き、見事に之を退治するといふ、頗る御芽出度い筋である。米國人は芝居でも活動でも悲劇的終局を好まぬ。

「それは悲劇的か（イズ、イット、サッド？）」と必ず訊ねる。一日の勞苦の後に更に悲慘な印象を受けるのは無意味だと考へる。藝術は何よりも先づ娯樂（アミューズメント）物でなくてはならない。日本人が芝居を觀て涙

を流さなくては滿足しないといふ心理は到底了解し得ないのである。深刻な心の痛みは熱い涙で洗ひ落さねばならぬ。其慰藉は情意の能動的活動に俟たねばならぬ。魂の表面を撫で、神經の末梢を搔る刺戟は單に皮相の苦を和らげるに過ぎない。此間の消息は終に米人の解し得ないところである。從つて安價な勸善懲惡が藝術の旗幟となつてゐる。少くとも劇場に於てはさうである。

然し本年六十七歳になる老優ジレット其人の技藝は一種犯す可らざる獨創力（オリヂナリティ）を持てゐる。藝術と人格との融合から生れる創造力を示してゐる。偶然にも私の宿の女主人公が、ハアトフォードに住んでゐる頃、ジレットの母親と懇意にしてゐたといふ。彼は感動すべき愛撫を以て其母に奉仕した。そして頗る素朴（プレイン）な其妻が歿してからは、幾多の緣談を斥けて、寂しい孤獨の生活を擇み、永い間舞臺から遠ざかつてゐた。「夢作る人」はこの老優が昔の華かな夢を忘れ象ねて、最後にもう一度藝術的幻影の世界に歸つて來たものと見る事も出來る。遠い〳〵昔の不幸な戀の形見を其人の娘に於て見出し、思はず「ルイーズ！」と呼び懸ける、其一言に、この淋しい老優の亡き母と亡き妻とに對する愛情が籠つてゐる

ボストンの雪（上）
ウエストボルン・テレエスの家（下）

アラスイラク・ツッリフ

やうであつた。その眼に、その唇に、その指に、その髪に亡き人の色と香が漂つてゐるのである。

或通俗小說から筋を取つたものではあるが「夢作る人」はジレット其人の創作と云つて差支無いやうである。そして彼の圓熟し切つた技巧（俳優として、又劇作家として）よりも、私は其體驗と藝術との契合に深い興味を覺えたのである。「夢作る人」は同時にまた「夢みる人」なのではないか。

青年は未來の夢を作る人である。中年は夢の破壞者である。そして老年は過去の夢を追ふ人である。海を渡つて此土地へ來てから私はよく夢をみる。然しその夢も皆日本の夢である。思ひも依らない遠い昔の夢をみる。私も亦漸く老いようとするのであるか。然したかうして旅から旅へと迷つてゆく私達は、夢の跡を追ひ現の苦さを味はひ、更にまた夢を作りつゝゆく人である。夢みる者は幸ひである。現に生きる者は其喜びを知らない。夢から醒めた者の心は淋しい。現に生きる者は其悲しみを知らない。米國人は現に生きる國民である。夢みる者の喜びも悲しみも知らない人々である。日本人はよく夢をみる。支

那人もさうである。露西亞人も屢々夢に生きる。そして、獨逸人も亦夢の國の住民である。浪漫主義者(ロマンティジスト)とは「夢みる人」の別名である。

然し、米國の倫敦と呼ばれ、「新英吉利(ニューイングランド)」の名を誇りとするこのボストンには、夢みる人、夢を作る人が尠くないやうである。美術館、音樂院、シムフォニイ・ホオル、圖書館、教會、到る處にさういふ男女の姿が認められる。公共圖書館(パブリック、ライブラリイ)へ入ると、有名なシャヴァンヌの壁畫が先づ吾々の心を學術と文藝の世界へ牽き入れる。彼處では雅典の美しい自然と建築とを背景にしてプラトーが學徒と語つてゐる。此處では盲目のホメエルが「イリヤッド」と「オディッシイ」の靈に依て桂冠を授けられてゐる。また中央にはエスキロスが書卷を手にして海を眺めてゐる。その後に巨巖に繫がれて苦悶する偉人の姿は「形づくる人」の永遠の惱みを語るプロメシユースではないか。平和な「牧歌」の情調の中に立つのはヴァージルである。ドリヤ式殿堂の廢墟を訪れて過去の幻影を呼び醒ましつゝあるのは「歴史」の美神である。天體を觀望するカルデヤの牧人は「天文學」の象徴であり、粗金をれいるこの中に鎔かす翼ある三の精靈を見まもる女神は「化學」の守護神である。而て物理學の精神は吉凶の報を傳ふべく空中を飛行する二つの女神に依て代表せられてゐる。更に正面の大作は下界に光明を齎すべき「天才」を呼び迎ふる九つの美神(ミューズ)を描き出だし、天才(ジェニヤス)と靈感(インスピレーション)との微妙な交感を現はす。更に階を上つて「交附室(デリケエリイ・ルウム)」に入ればアッベイ(Abbey)の圖案に成る「聖盃の行方」(Quest of the Holy Grail)と稱する十五面の神韻漂渺たる夢幻の世界が展開せられ、上層階には有名な「サアジエントの廻廊」が宗教の神祕と發達とを物語つてゐる。それは異教から猶太教を經て基督教に到る迄の信仰の推移を示すものである。同じ人の筆に成る美術館の圓屋(ロタンダ)の天井畫も亦ボストン市の誇りの一つである。然し氏の筆觸の妙味は却て草畫めいた小品に於いて覗はれるやうである。ミレエのそれと共に永く後世に傳はるべきものであらう。

圖書館と相對する聖一教會(トリニティ・チャーチ)の古色蒼然たる建築を眺め、更に美術館を訪れて、埃及、アッシリヤ、古希臘あたりの藝術から、文藝復興(ルネサンス)時代の逸品を漁り、支那、日本の美術品の蒐集(コレクション)を一覽し、到る處に畫架を置いて、熱心に模寫する清楚な若い女流美術生の姿を見ると、乾燥無味な沙漠の如き米國の中にもなほ夢を育くむ(はぐ)オアシスの在ることを思はせられ

る。更にまた、ベエトオヴエンの名を正面の欄間に刻み、莊麗なパイプオルガンを背景とし、左右の壁間に美神の像を据ゑたシムフオニイ・ホオルの一隅に坐して、靜かに音樂に耳傾けるときは、そゞろに藝術の國に生れ出た感を禁じえないのである。中にも、舊臘物故した佛蘭西大作曲家サン・サアンの記念演奏として、ハンデル・アンド・ハイドウン社（Handel and Haydn Society）が、エミイル・モルレンハワア氏の指揮の下に、故樂聖の大作「サムソンとデライラア」をオーケストラとして演じた時の印象は、永く忘れることが出來ないであらう。白衣の女と黑衣の男と、四百の聲が管絃樂の微妙な調べと融合して天國からのやうに響いて來るのであつた。曾てメトロポリタンで妖艶な「クンドリ」に扮し、凄婉な「ブリユンヒルデ」を演じたマルガレエト・マッツエンアワアが其夜は特に質素な黑衣を纏つて愼まし氣にソロイストとして舞臺（ステージ）に立つた。「サムソン」の役は同じくメトロポリタンのキングストンが歌つた。比ひない肉聲の美と微妙な管絃の調べと、故人に對する追憶の情と作そのものゝ內容とが一つに融け合つて一種譬へ難い莊嚴悲愴の雰圍氣を燻釀するのであつた。「バルシファル」を聽いて獨逸音樂の幽玄な趣を味はつた私は「サムソンとデライラア」に依つて佛蘭西音樂の美に醉はされたやうな氣がした。そして「國民性」の相違「自然」と「人間」との深い交渉に想到せざるを得なかつたのである。恐らく歌劇として見る場合にも、コンサアトとして聽いたこの夜のそれに優る印象は與へられまい　思ふ。

二

ボストンの音樂に就ては可なり豐富な材料を持つてゐるが、それは他の機會に讓つて、少しく身邊の出來事に眼を轉じよう。つひ私の傍に「夢みる人」が住んでゐるからである。それは私の宿の一室に唯一人で住む老ドクトルである。最早七十歳の坂を越えてゐるのだが、親戚といふものはこの廣い世界に一人もゐない。否、唯、一人だけゐる。しかも、それは大聲樂家として聞えるネリイ・メルバ其人である。老ドクトはルーズヴエルトよりも一年前にハアヴアードを出たと云ふ。極めて上品な、もの靜かな、親切な老紳士である。雨が降つても、雪が降つても、耳が切れて落ちさうな風の日にも、ドクトルは古ぼけた茶色の手提を持つて、ぶらりと出て行く。何處へ行くのだか誰も知らない。恐らくドクト

ル自身も知らないのであらう。勿論、何の職業も持つてゐない。その古鞄の中に何が入つてゐるのか、それは大きな謎である。私が或恐ろしい寒い日に街を彷徨つてゐると（かう云ふ私も實は何のあても無くぶらつく人間の一人なのだ）向ふから鼻の先きを眞赤にしたドクトルの姿がひよつこり現はれた。「や、お寒う御座います。何處へ？」（實は英語ではこんなに輕く出ないのだが）。「可なり寒いが然し歩くには結句氣持が好い。グッド・バイ！」と堅く握手して行て仕舞ふ。勿論かういふ人に行先を訊ねるのは心無い仕方だと思ふから私も其儘別れたが、振り返つて其後姿を一瞥せずにはゐられなかつた。古い山高帽、古外套、古靴、古洋傘、凡てが古い。人間も頗る古色を帶びてゐる。しかも、カラーだけはいつも雪のやうに白く、ネクタイ留針（ピン）が整然と同じ位置に光つてゐる。ゆつくり、道を測る人のやうに歩いて行く。それから、二三十分程して、ずつと下町（ダウン）の方へ出たら、また思ひがけなくも向ふ側をこぼこぼ歩く老ドクトルの姿を見出した。一體何處へ行く氣であらう？「永遠の猶太人（エタアナル・ジユウ）」といつたやうな考へがちらと私の心を掠めた。然し、さうした不吉な比喩をこの好紳士に當て嵌めるのは甚だしい非禮であると思つてすぐそれを打ち消した。

ある雪になるべき寒い夜の事であつた。吾々は電燈の光を消して、薄闇の中に靜かに蓄音機の奏する樂の音に耳を傾けた。その中に老ドクトルが集めたレコードが幾枚かあつた「タンホイザア」の「巡禮の合唱」、シューベルトの「小夜樂」、さういふ曲目の後にメルバの「グッド、バイ」が奏せられた。四五年前、シムフォニイ・ホオルでメルバがこの歌を歌つたとき、餘りに感情が籠つてゐたので「おさらば、さらば」と心の中に最後の告別を期し、永久に樂壇を退く意を洩らすのではないかと考へて思はず落涙した人が尠なかつたと云ふ。

メルバの聲は甘く、朗に、また悲しく、果ては啜り泣きの氣はひさへ交つて、聽く者の魂を遠い遠い夢幻の世界へ牽き入れる。燈を薄め、息を潛めて私達は其微妙なメロディに聽き耽つた。老ドクトルの眼は何時か涙で光つてゐた。ミセスの睫毛も濡れてゐるやうであつた。そして、七十を越したこの老紳士の孤獨な身の上を思ひ、遙々海を渡つて異鄕をさすらふ自分に想ひ到つたとき私の胸も亦怪しく逼つて來るのであつた。それは雪になるべき夜の事である。楡（エルム）の梢を渡る氷のやうな風が窓に颯と當つては、また無限の闇に消

えて行く。かくてわが懐かしい音樂の都の夜はしんしんと更けるのである。

ぐつごばい
ぐつごばい！
歌ふは比ひなきメルバ、
聽くはその血に通ふ
老ドクトル、
七十の坂を越して、
この世にたゞ獨り、
メバルこそ命、
メバルの聲ぞ命、
歌ふひとも、
聽く人も、
いつかは、ぐつごばい、こ

わかれゆかむ、
かく思ふ我れも、
このまごゐより、
別れゆく日は近し。
ぐつごばい！
ぐつごばい！
今わかれて、
また逢ふべき、
時やは來る、
ぐつごばい！
ぐつごばい！
西に東に、
わかれても、

心は通はむ、
ぐつごばいこ
わがメルバの
歌ふをきけば、
ぐつごばい！
ぐつごばい！

三

メルバの歌を聽いて、竊つこ欠呻を嚙み殺してゐた少女がある。舞踏の達人であり、競泳の選手であり、バスケットボール、庭球、野球こ殆ご凡てのスポオトに通じてゐる。そして作曲、劇作の才があり、特に太鼓（ドラム）に熟達してゐる。褐色の髪を短く剪り、水夫服を着け、よく發育した、男のやうな體格で、頭を昂げて濶歩する。

この少女が頸を反らして短髪を後ろに拂ひ、唇を堅く閉ぢ、少し上眼して、ヴ井クトロ

ラの舞踏曲に合はせて拍子（タクト）を保ちつゝ大小の太鼓を打つこき、雪白の手は絶え間無く輕快に動き、足は忙はしく踏板（ペダル）を踏み、若い血汐が雙頰に上り、灰色の眼は輝きを帶びてくる。それは生の「舞踏曲」である。生に對する挑戰（てせん）の曲である。「ぐつごばい」の歌こ何たる對照（コントラスト）であらう。少女は過去の夢に住む老ドクトルを憐んでゐる。彼女は未來の夢に生きる人である。そしてその夢が絶えず現在こなり、過去こなり、刻々に其色彩を變じて彼女の眼の如く灰色に化し去るのを知らない。彼女は樂壇を夢みる。脚光を夢みる。そして恐らくまた家庭を夢みる。私は其最後の夢が最も良き形で現實こなる日の近い事を祈る。

飽迄現在に執着するこの國の人々の中にも藝術界の寵兒たる事を夢みる女性が尠くないのをみて、今更藝術的表現欲の普遍なるこを感ずるこ同時に、その欲求の純不純の問題に想到せざるを得ない。然し、ボストンには眞に東方の國日本を夢み、日本人を熱愛するやうな人々が少くない。私が二三の婦人を日本料理店に招待したこき、日本の「箸」を好記念こしてポケットこ藏め、更にその日の獻立を日英兩語に認めて持ち歸つた老婦人が

あつた。吸物の中の「蓴菜」の説明を求められて咄嗟に答へることが出來なかつた。近く催されるといふ假裝會には特に日本の茶店を設けて「大名」を出し、其時代の扮裝を凝らした給仕女に日本の茶菓を運ばせると云ふ。また紐育にはホルムズといふ一流の演說家がゐて、幻燈と活動寫眞とを用ゐて日本の風俗、景勝を紹介したといふ。この人は住宅の天井を突き拔いて、法隆寺の壁畫の模寫で四壁を飾り、電燈の笠には陣笠を用ゐ、紋服を着け、圓にHの定紋を造り、居間には簞笥、長火鉢、日本の夜具等を置き、洋服は殆ど用ゐぬと聞く。この人の說に依ると、日本ほど淸潔な國民は世界に無い。そして、古來不潔な國民が優れた文明を生んだ例を見ないと云ふ。この人は最後の「休養」の爲めに再び日本へ行くさうである。更に、かのヘレン・ケラアを思はせるやうな、殆ど失明に近い若い婦人がゐて、驚く可き敏感と深刻な洞察力とを以て特に日本の文化を研究し、夏目の「猫」を賞讃し、禪學の妙諦を「遊離的」態度に在ると解釋したさうである。これ等の人々が西歐の物質的文明の病弊を看破して、東方文化の精髓を把捉しようとする努力はかの表現主義の思想が「母の國」として東洋に憧がるゝのと其軌を一にするものと云へる。

表現主義に關しては、米國でも最近多少の反響を見出してゐるやうであるが、日本では既に幾度か紹介せられ、其代表作「カレーの義民」の上演となり、「カリガネ博士」の映寫となつたといふ事は、この國の文學者にとつても全く意外の事實であるらしい。日本人の慧捷には誰も一驚を喫する。然し、その餘りに早く熱し、餘りに早く冷める事も亦この國の人々の豫想外でなければならぬ。「不器用」であると同時に「ねばり强い」事は米人の長所である。この點は更に獨逸に於て吾々が痛切に感ずるであらう。

四

表現主義の特徵の一つとして私はその還元的傾向を擧げ、原始的生活への復歸と憧憬とを說いた（拙著近代獨逸文學研究參照）。ハウプトマンの「誰も知らぬ」の如きは代表作の一つである。そして最近に私がボストンで見た「綠の女神」（The Green Goddess）といふ劇は少くとも其環境に於てハウプトマンの作に類似して居る。作者は劇評家として、又イブセンの紹介者及翻譯家として有名な井リアム・アアチャーである。この人が創作家として

打つて出たといふ事が興味の焦點となり、また其主役を演ずるジョージ・アアリス（Arliss）の盛名が一層人氣を呼んで、紐育ではシーズンを通じて續演せられ、非常な喝采を博した。「夢作る人」に於けるジレットと共にこのシーズンの雙璧と稱する事が出來る。

劇そのものは疑ひも無く一の「メロドラマ」であり、一の悲喜劇である。文明の衣を通して現れる獸性の暴威に、暗い戀愛の三角關係を搦ませたもので、手法は作者の師匠たるイプセンと作者の友人たるショーとに負ふところの多い事は明かである。そして興味の中心はヒマラヤ山の彼方に孤立するルーク王國（Ruch）の酋長が英國で近代的教育を受け、あらゆる文明の利器を備へ無線電信まで裝置し、完全に英語を話し、全然英國紳士の生活を營んでゐる事である。然も彼の血に潛む猛獸的本能は常に「眼を以て眼を、齒を以て齒を」償ふ事を忘れしめない。飛行機の故障のためにこの國に着陸した英國の少佐夫婦と其友人のドクトルとは、英領印度に於て死刑の宣告をうけた酋長の兄弟の代償として、この國の守護神「綠の女神」の犧牲とならねばならぬ。唯、美しい少佐夫人が酋長の妃となり其子を產めば、彼女の愛人たるドクトルの命も共に救はれるのである。前の幕で酋長が賓客のためにヴイクトロラで奏したグノオの「葬送行進曲（フユネラル、マアチ）」が恐ろしい讖を成した。彼等は囊中の鼠である。必死の覺悟で、少佐が無線（ワイヤレス）電信を利用して救ひを求める。その爲には酋長の祕書役の狡猾な英人が虐殺せられ、少佐も亦酋長の射擊の下に倒れる。今や、相思の男女は未來を誓つて「綠の女神」の神壇の前で犧牲とならうとする。ドクトルの受ける殘酷な苛責と、子供に對する愛とが一瞬間若い未亡人の心を鈍らせる。その時、「機械からの神（デウス、エキス、マシナ）」として突然救濟の飛行機が天空に現はれ、その爆彈の威力に依つて白人の命が助かり、同時に看客が滿足するのである。

筋から見ても、極めて甘いメロドラマであるが、文明と野蠻との異樣な混合、原始宗教、土人の奇怪な舞踏、羊の衣を纏つた狼のやうな酋長の不思議な性格（それは或意味に於て現代文明人に對する辛辣な皮肉でもある）、それ等が興味を喚んで、紐育では一年間も打ち通し、ボストンでも非常な歡迎を受けつゝあるのである。特にアアリス其人の藝風がこの主役に極めて適合し、殆ど作者の豫期しないやうな効果を擧げてゐると評せられる。ボストンのプリマウス座で、彼は幕間に一場の謝辭を述べねばならぬやうな喝采を受けた。

ハウプトマンの「インデイボーデイ」に比して、其思想感情の深さは勿論同日の論ではないが、人間の原始性に觸れ、二つの文明の錯綜を描いた點に於て兩者相通ずるものがある。そして、この評論家が今日に至つて始めて創作の筆を執つたといふ事も亦極めて興味ある事柄である。永く「イプセンの使徒」を以て任じてゐたアアチャーも終に自分の影を地上に印してゆかうといふ欲求を拒むことが出來なかつたのであらう。

「使徒」といふ言葉によつて私はイエール大學圖書館のシュベック氏が一生をゲエテに捧げ、今や四十年以上もゲエテに關する蒐集に沒頭してゐる事實に想ひ至らざるを得ない。ゲエテの書翰、原稿（ファウスト第二卷中の二三頁もある）、鷲筆（昨年四百弗で手に入れたといふ）肖像、無數の珍書、各國語の飜譯書、ワイマアルで採集して來た「ゲエテ家（ハウス）」附近の草花の標本さへ備はつてゐる。この人は元來藥種商であると云ふ。今はイエール大學でゲエテを講じてゐる。かういふ人が米國に住んでゐるといふ事は、かの老ドクトルやホルムズ氏、又失明の夫人コールフィールド孃等と共に、私をしてこの國に名殘を惜ませる主な原因となつてゐる。

二日後に私は大西洋を渡つて歐洲へ行かうとしてゐる。私の夢が如何なる形で實現せられるか、それは豫想が出來ない。唯リアリズムの國を去つてロマンチシズムの國を求めつつ行くのであるといふ事だけは確かである。

夢作る人

豌豆の花

倫敦

一

メリィ！いかに驚く可き名よ
是れより美はしきは絶えてなからむ、
それを聞けば優しき俤のそゞろにも浮び來るなり。
メリィよ、奇しき少女よ、
汝は天國をもたらせり、
われは永久に汝が名を愛でむ、
そはわが母の名もメリィなりければなり。

かしこの折り曲れる小徑の、
水車のほゝりに、
戀人のする如く二人は囁きぬ、
「然り」と彼女は囁きぬ、
碧き眼に誠の愛輝けり、
彼は云ひぬ、「メリィよ、汝は女神なり、
われに取りて全世界より尊し」

金色の太陽汝が髪に接吻し、
黄金もてそを彩れり、
わが母の髪も同じ色なりき、
軈て秋の影忍び寄りしとき、
星は其上に銀砂を振り撒けり。

メリイよ、黄金は灰色に變るとも、
汝を愛づるわが心はかはらじ。

虎春狩方街（トラファルガア・スクエヤ）は身動きも出來ない程の人出である。國民美術館（ナショナル・ギヤレリイ）の大石柱の臺上へ無理に立つて見たが、驚に生れて來なかつた悲しさに、隻脚（かたあし）の藝當は永く續けられる筈が無い。「御菓子は如何？チョコレートは？」とかういふ時には洋の東西を問はず雨後の茸のやうに出現する際物師の男女が冷嘲（ひやか）すやうな眼つきを投げて行く。今朝つひ朝飯を外（はず）して大分空腹を感じてゐるのだが、西洋の男女のやうに往來で平氣な顔をして立喰ひをする氣にはなれない。さうかと云つて「一寸蕎麥屋へ」と云ふ都合にも行かない。少々眼が廻つても我慢する事に極める。

今日（一九二二年二月二十八日）は皇女（プリンセス）メリイと子爵（ヴアイカウント）ラツセルスとの所謂御成婚（Royal Wedding）の當日である。倫敦近郊は勿論、巴里其他の地方からさへ多數の老若男女が集まつて、各ホテルは滿員の盛況である。今日は天氣も麗かで人々は春のやうな氣分に醉つてゐる。古典的の服裝をした近衛兵が壯麗な行列を導く。私は何時か群衆の中へ紛れ込んで身動きも出來ない始末になつた。日本にゐてもかういふ時には大に割の惡い私の事であるから長大な歐洲人の中へ混ると肩と帽子の壁に十重二十重と取り圍まれて肝心の行列は皆目見えない。唯騎兵の帽と旗だけがウエストミンスタアの大伽藍を指して動いて行く。盛に歡呼の聲が起り手巾（ハンカチ）が振られる。失神（フエイント）して巡査に扶けられ、辛うじて群衆の間を縫つて行く婦人が續々現れる。空腹を訴へて憎さ氣な母親に叱られてゐる子供が一番私の同情を惹いた。かういふ時にも愛嬌を失はず、笑ひながら群衆の雪崩を押戻して靜かに馬を乘り入れる英國の巡査にひどく感心しながら、私は觀念の眼を閉ぢて見物の包圍の中に默然と立つてゐた。考へてみるとかういふ盛儀としては市中の裝飾其他が極めて貧弱である。人出から云つても日本の大都會のそれに比して寧ろ淋しいやうな感じがする。或は紐育あたりの混雜を見慣れた私の視神經が少し痲痺してゐるのかも知れない。

其夜は然し伊太利あたりの謝肉祭夜のそれのやうに到る所で祝宴が張られ、三鞭酒が拔かれ、男女は曉の白むまで踊り狂つた。私は昔の友と其親しい淑女（レディ）と三人で或るさゝやか

な伊太利のレストランで靜かに祝杯を擧げた。給仕人が眼無鬘や道化役者のするやうな赤い鼻なごを着けて滑稽な身振りで酒を薦めた。私も美しく彩色られたコンフエッチを男女の客に向つて投げた。紐育の大晦日の夜ブロオド街を歩いて玩具の喇叭や笛なごで通行人に惡戯をした事が遠い昔の出來事のやうに思ひ出される。かうして知らぬ他人同士が平日の小六かしい禮儀作法を忘れて互に心置きなく親しみ睦み交しつゝも或點までの節度を失はないところは流石に奥床しく感ぜられた。

二

三四日してウエストミンスタアの伽藍へ行つてみた。後に巴里のノオトルダムも見物したが、この伽藍の方が莊嚴雄大の感じに於て勝つてゐるやうに思はれる。その時の私の氣分にも依るのであらう、又佛蘭西の建築が常に一味の纖巧の美を失はない事にも原因してゐるのであらう。ウエストミンスタアでは丁度祈禱が行はれてゐた。薄暗い大伽藍の中で敬虔な男女の傍に坐つて微妙なオルガンの音に耳傾け紅の衣に雪白のガウンを重ねた僧侶の太く錆びた聲と、少女と見紛ふ美少年の雛僧の細く澄んだ聲との和律に魂を拔かれた。私も其處へ跪いて熱い涙を灑ぎつゝ祈りたいやうな氣持になつた。左右に立つ幾多の英雄、詩聖、哲人の像が重く〳〵私の碎けた心を壓する。永久に失はれた魂の淨らかさと和みとに對する憧がれであり悲しみである。大禮に用ゐられた式壇が陰鬱な薄闇の中へ一道の光輝を投げる。かういふ尊い靈場で結び付けられた二つの魂は永久に離れ背かないであらう。

議院（パアラメント）の建築の美は想像を裏切らない。一般に米國から來て見て何よりも眼を驚かすものは倫敦の建築と自然の美である。パアラメントからテエムス河畔を通つてあの典雅なテエト美術館まで行く途すがら、また倫敦塔から塔橋（タワアブリッヂ）を眺めたときの光景の如きは到底米國で求め得べくもない。到る處に空へ向つて憧がれる尖塔があり、青く流れる水があり、柔かい綠草がある。この環境に置かれるとき中世の武裝をした衞兵が武者繪から拔け出たやうに門側に立つてゐても別に不調和の感を與へない。

然し議場そのものは思ひの外に狹隘であり、亂雜であるやうに思はれた。華盛頓府のそ

れの方が遙に議場としての價値に於て勝つてゐる。パアラメントは一個の美術的モニュメントとして評價せらる可きであらう。議會そのものゝ光景は世界の最大富强國のそれと云ふより寧ろ地方の小都會の集りといふやうな感があつた。議題が「瓦斯の調節」と云つたやうな乾燥なものであつたせゐか可なり惰氣に滿ちてゐた。議員の中には女性も四五名交つてゐた。ロイド・ジョウジもゐたさうだが見落した。瓦斯問題から教育問題に論及した人もあつたが大して反響を見出さなかつたやうだ。一般にその日は能辯の人に乏しいやうに思はれた。シルクハットを冠つて兩脚を投げ出して何か外の事を考へてゐるやうな人もあつた。ロイド・ジョウジも其内の一人であつたさうだ。怪しからぬ話だが實は私はまだ日本の議會を傍聽した事が無いから比較は出來ないが、新聞の記事で想像してゐた光景から推すと、英國の議員は日本の夫よりも遙に靜肅に議事を進行させてゆくやうだ。尤も問題が問題だつからでもあらう。私達はM參事官の紹介に依て柄に無く傍聽に來たのだが、門衛、使丁等の親切な態度には全く感心した。歸りに外套まで着せて呉れて、向ふで「有難う」と云はれたのには聊か恐縮した。一體に倫敦の人は矢鱈にサンキューを濫發する。

ホテルのメイドが暖爐の火を作つて「サンキュー」と云つて出て行く、「御用をさせて頂いて誠に有難う御座いました」と云ふ譯でもあるまい。兎に角米國から來ると「貴下」と「有難う」とが一種の親しみと溫かさを感じさせる。倫敦の女性も亦米國のそれのやうに男を見下す態度でなく、料理屋の勘定場の女でも愛嬌を持てゐる。一寸日本へ歸つたやうな氣分を起させる。それに容貌風姿も所謂江戸向きで、面長の、眉目が判然してあつさりと垢抜けがしてゐる。「裘」の怪物のやうな、五位鷺が水を渡る時の樣に脚を露出したブロオド街邊の女を見慣れた眼には「清楚」と「健全」といふ感じを與へる。但、所謂上流のオスカア・ワイルドの「つまらぬ女」に出て來るやうな貴婦人連になると下町風な成金式の米國女よりも一層鼻持ちがならないのも居るらしい。「貴族的」は、それが醇化せられた形で現はれると黄金が持つやうな床しい光りを放つが、一旦それが「虚飾」となり「自惚」になると腐つた胡瓜のやうな惡臭を發する。倫敦社交界の所謂「茶」の集りに對しては一種の「恐れ」を感ぜざるを得ない。そこへ行くとがさつな、新開地氣分の米國男女の集りの方がいつそ氣樂で好い。

聯想が今私を「オリムピック」の甲板の方へ連れて行く。

三

白星線（ホワイト・スタア・ライン）の「オリムピック」號は四萬六千四百三十九噸と稱せられる。實に尨大なものだ。私はドクトルA氏と一緒に甲板の最も小じんまりした一室に收まつた。設備の點では佛蘭西船が一番優れてゐると云ふ。巴里號の内部も曾て一覽した事がある。然し私共には矢張日本船が一番居心地がよく、殊にサアヴィスの點で一頭地を抜いてゐるやうに思はれる。小さいなりによく整つてゐる。何も大きいばかりが能ではない。西洋へ來て妙に私は日本人員になつたやうだ。公平に見て日本の文明は今日歐米のそれに決して劣つてゐないと思ふ。勿論まだ混沌としてゐるが、その時代錯誤的のところに、新舊雜然としてゐるところに、又一種の妙味がある。大西洋通ひの船の中は殊に禮儀作法が八釜しいと聞いてゐた。成程所謂紳士淑女連が綺羅を飾つて、夜は盛んに舞踏をやつてゐる。晩餐の食卓では禮服を着ねばならぬ。東洋人は一隅に固まつて眼ばかり光らせてゐねばならぬ――さういふ樣に聞いてゐたが、少くとも今度の航海では我々日本人は十數名もゐて、食堂でも上等の席を占めてゐた。樂隊は特に「君が代」を奏して呉れた。華府會議の結果日本人は一層親しまれ畏敬せられて來たやうだ。何も遠慮する事は無いと思つて私共は甲板へ出て各種の遊戯をやつたり、運動室に入つて木馬に乘り、自轉車を踏み、端艇を漕ぐ練習などもやつた。第一に酒精が天下晴れて飲める嬉しさに、船が出ると直ぐに、英國名物の「スタウト」を味はつた。これが癖になつて英佛滯在中は動もすると杯に親しみ勝ちになつたが、全く米國の無精生活（ドライライフ）の反動である。

冬のアトランティックは荒れると聞いてゐた。A氏は私よりも船に弱いとあつて、私は上（アッ）寢臺（バアス）を取る事にした。品川沖で船暈に罹つた私を想ふと誠に隔世の感がある。「オリムピック」は最近二度まで難風に逢つて、一度は窓硝子が落ちて船客の一人が卽死を遂げたと聞いてゐる。今度の航海は然し比較的平穩であつた。一週間の中三日ばかりは多少浪が高かつたが、大平洋の怒濤を乘り切つた經驗があるので「この位の浪は甘いものだ」と濟ましてゐた。「シーシック・レメディ」の效驗もあつたのであらう、又酒精が利いたのでもあ

らう、A氏も終に船暈らしいものを感じずにすんだ。同胞の船客が多いので西洋人と話す機會はなかつた。唯一人水夫服を着た可愛い少年と心易くなつたばかりである。讀書室などの古典的裝飾は氣に入つた。一般に英國のボオイの立居振舞、接待ぶりの叮嚀で親切なのは嬉しかつた。然し、時々「バア」で賭戯のやうな事をやるのは苦々しい。さういふ商賣人がゐて、一日の航程なぞでスペキュレエションをやるものらしい。最後の日にその男が「バア」の一隅に坐つて、杯を前にして沈み切つた顏をしてゐたところを見ると、商賣は頗る不振だつたらしい。好い氣味だと思つた。

要するに所謂「上流社會」の娯樂などといふものは、かうした世界社交界の縮圖とも云ふべき船内生活にも現はれてゐるやうに、頗る殺風景な、退屈なものだ。やはり「自然」がなつかしい。サウサムプトンへ上陸して、汽車でロンドンへ行く途中の景色は眼が醒めるやうに美しかつた。二月下旬の事であるが牧場は綠色に匂つてゐた。牧牛が悠々と草を喰んでゐる。あの揚子江沿岸の景色を想ひ出させるやうな長閑さがあつた。英國の自然は美しいと染々感じた。

「自然への逃避」の要求がまた私の胸に甦つた。ホテルに近い停車場から汽車に乘つて私は獨りキウー・カアドウン（Kew Garden）といふ有名な植物園へ行つた。三月六日の事で、温かい、よく晴れた麗らかな日であつた。全く一人になつてかうして郊外へ出て見ると、始めて遠く遠く國を離れてゐる事が感ぜられる。そして同時に「自然」の廣大無邊の懷に抱かれてゐる身の心安さを覺える。

四

英國の庭園が持つあらゆる美しさが私の眼の前に現れた。日本の桃や李が滿開である。何處からともなく小鳥の歌が聞こえて來る。柔かい綠の褥が到る處に私を待つてゐる。古い塔（パゴダ）が聳えてゐる。多くの温室内には世界中の植物花卉が集められてゐる。熱帶植物の息苦しい樣な温氣に包まれて靜に讀書する老紳士がゐる。燃えるやうな紅紫の草花の中を腕を組んだ若い男女が逍遙してゐる。鬱蒼たる樹木の下草には殘んの雪のやうに白い花が咲き滾れてゐる。泉水の邊に兩人の少女が鯉に餌をやつてゐる。岡の繁みの間を鵠鶴が長

い脚をしてのそりのそりと歩いてゐる。私は半日をこの樂園に暮した。「無爲にして化す」といつた氣分に飽迄も浸つた。「自然」の慈愛、天地の間に漂ふ大きな「ユーモア」とも云ふ可きものを深く〳〵呼吸した。

その夜私達は「コオト・スイヤタア」といふ小劇場でガルスワアシイの「鳩」を觀た。後に伯林の「レッシング座」で觀たハウプトマンの「畵伯クラムプトン」よりもより深い感銘を與へられた。主人公なる畵家の生活と稟性との間に共通なところがあり、其環境も似たところがあるが、クラムプトンは餘りに病的であり、自暴自棄に傾き、餘りに神經が尖り、苛立つてゐた。ブルトハウプトの評したやうにそれはハウプトマン其人の取扱ひ方にも依るが、俳優（クレッフア）の解釋又は稟性にも關係してゐた。ガルスワアシイの「鳩」は「自然」の持つ温かい心と大きなユーモアとの所有者であつた。そして其娘はクラムプトンのそれよりも強く深い性格を持つてゐた。肉食鳥の中に交る「鳩」の運命は悲慘でもあり、笑止でもある。然し又そこには限りない懷かしさと、云ひ知れぬ氣高さとが含まれてゐる。其周圍に在る敗殘の男女にもそれ〴〵鮮かな個性が與へられ、獨自の運命が描き出されてゐた。殊に放浪者フエランと花賣女ムガンとは「夜の宿」のサチンとナスチャを想はせるやうなものがあつた。そして、アカデミック乃至オーソドックスの世界に對する諷刺もハウプトマンと共通の處がある。社會的同情の契機はハウプトマンに於ても强かつた。然し彼には社會主義的詩人となる可く餘りに多く抒情的要素が潜んでゐた。今の彼は寧ろ神祕主義的とも稱する事が出來よう。ガルスワアシイに比して著るしく主觀的である。最近の作物は最少獨逸派の人々の間に甚だしく不評を買つた。ハウプトマンは最早過去の人物だとさへ云はれる。然し彼のゾアナの異教徒を讀んだ者は俄にこの早急な斷定に同意する事は出來ないであらう。

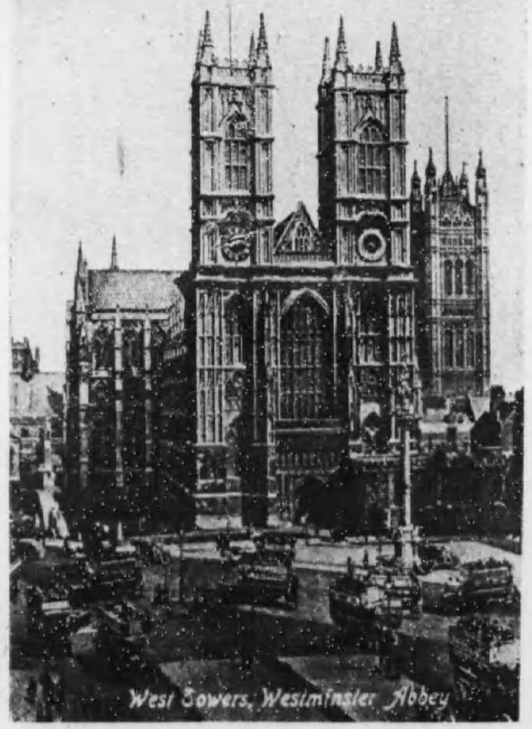
植物園で早春の氣分を十分に味はつて蘇生したやうになつた私は更にリッチモンド公園へ行つてみた。倫敦近郊で最も景勝の地と云はれてゐるのである。けれども其日は曇り勝ちで、向ふに着いてからは終に雨になつた。丘陵からテエムスの流れを見下ろす眺めは幽寂の感を與へたが、公園そのものは聊か廣漠に失して纏まつた印象を得難い。東京の飛鳥山を何十倍かしたやうなものである。鹿や牛が呑氣に遊んでゐる風情は奈良を想はせる。

然し春日山のさびゝ嫩草山の柔か味は求められない。馬車もあつたがタキシーで一巡した。日本を出る時から傘こいふものを持たない。米國では年寄の外は餘り傘をさゝないやうだ。殊に紐育はさうである。ボストンでは大分傘を見かけた。日本ほど雨が多くない爲もあらうし、又服裝の關係上必要が少いのであらう。紐育の如きは非常な雜沓であるから邪魔にもなるのだらう。若い女が雨や雪の中を平氣でさつさゝ男を追ひ越して歩いてゆくのは「颯爽」こでも評したい氣がする。何も年寄に見られたくないからではない。旅をするのに厄介だから私は傘を持たないのだ。けれごもかういふ時には困る。

五

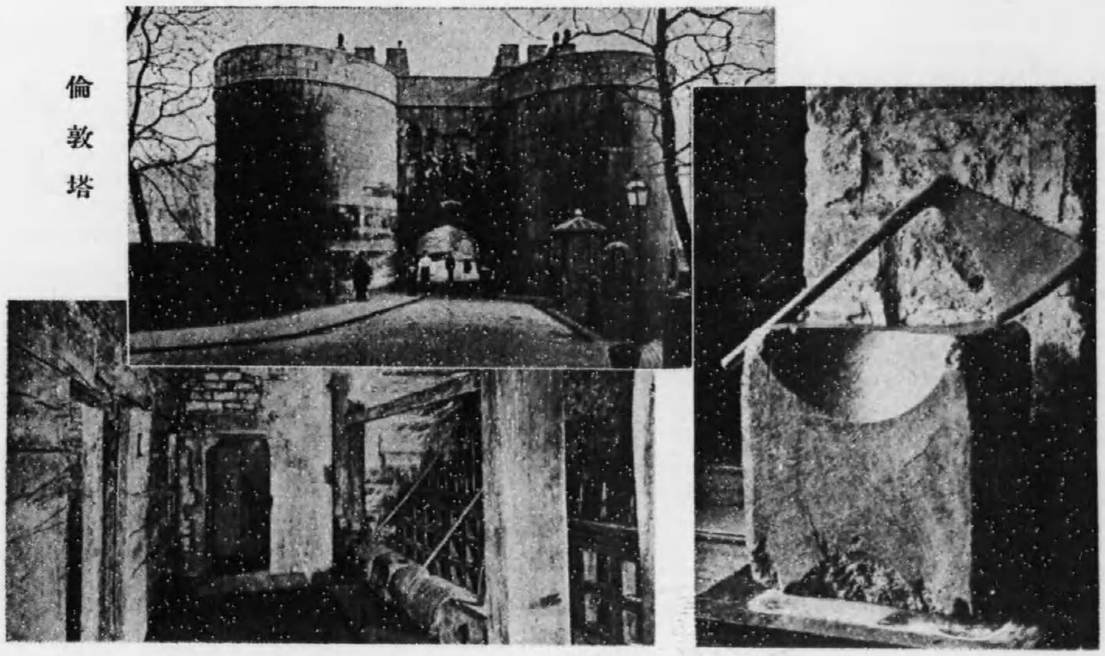
田舍へ行つて雨に逢ふこ蛇の目が欲しくなる。京都の女がさす繪日傘にも棄て難い風情がある。獨逸では傘を持つ人が大分多い。然し傘無しで雨の中を歩いても少しも怪しむ者は無い。私の知つてゐる女流塑像家は生れてから傘を持つた事が無いこ云つた。一つは交通機關が完備してゐる爲であらう。電車、乘合自働車、地下、高架の外に無數のタキシイ

プリンセス・メリイこ
ラセルズ子爵



ウエストミンスタア・アッベエ

倫敦塔



がある。巴里と伯林には馬車（ドロシュケ）もある。倫敦の地下電車（アンダア）は二段になつてゐる。尤も私には方角知覺が餘程缺乏してゐると見えて、かういふ交通機關を縱横に利用する事が出來ず、色々の意味で大變損をして來た。伯林へ來てもまだ一向見當がつかない。芝居へ行く道と大學へ通ふ道筋を覺えた位のものだ。それに東京者の惡い癖として人に道を訊くのが嫌ひなので一層いけない。話が大分岐路へ入るが、もう一言交通機關に就て日本との比較を述べると、「客に對する親切」といふ點では恐らく日本が世界中一等だと云つて差支あるまい。米國では汽車の停車場の名さへ碌に掲示してない處がある。地下電車の停留所の順序なども分らないから、風來の客は始終不安な思ひをせねばならぬ。倫敦のは表が出來てゐて便利だ。然し日本の樣に前後の停留所の名稱まで掲示してあるのは見た事が無い。博多の電車にはたしか其日の天氣豫報まで出てゐたと思ふ。凡そ「氣の利く」といふ點では日本人が一番勝れてゐるのではあるまいか。「察し」がよく、「思ひやり」があるといふ事も他に類を求め難いと思ふ。一般に「敏感」の點に於て日本人は佛蘭西人と並び立つことが出來る。或は之を凌駕してゐる。或人は之を「苦學生の心理」だと評したが、成程一方に「猜

疑」、「卑屈」といふやうな弱點を伴ふ事もあり得るであらう。然しかうして旅をしてみると、矢張日本は住み好い處だとつくづく思ふ。そして、それは單に自分が日本人であるからでは無い。日本の風土、生活、其の他が一種溫か味のある、餘裕のある空氣を作つてゐるからだ。もう少し物質的壓迫が輕減せられたら日本は一の樂土と云ひ得られるであらう。日本を慕ひ、日本の美しい風習が日々に毀たれてゆくのを歎く外人は決して尠くない。どうしてこの傳統的の美しさを泰西文明の利便と調和させて行く可きかは實に重大な問題であつて、同時に至難な、然し勞に酬いる任務であると思ふ。これは少數者の「協議」に依つて成し遂げられる事柄でないのは勿論である。各方面に天才又は能才が出現して、それ等の仕事が「時」の力で醸醸せられ、浸潤して行くのを待つ外はあるまい。

「倫敦塔」に就て書かうとして私の筆は澁る。故漱石先生の名文が頭に浮ぶと、私のやうな散文的な見聞を叙述する事が一つの冒瀆のやうに思はれる。かういふ陰慘な恐ろしい區劃が二十世紀の世界に殘されてゐるのは奇蹟である。希臘、伊太利或は埃及、アッシリア其他東方の諸國は知らず、私のやうに新世界を廻つて來た者の眼にはたゞ一つの驚異と云ふ外はない。「血の塔」（ブラッディ！・タワア）の中を米國あたりの觀光の男女の後について歩いてゆく自分が不思議のやうに思はれる。史的追想に耽るには餘りに私の知識は貧しい。十四五年前の事であつたらうか、私は或夜この塔を夢みた。漱石先生の作から生れた幻影だつたかも知れない。その時私は無數の囚はれ人と一緒にこの塔の中に幽閉せられてゐた。黄金の髪を重く長く垂れた美しい高貴な人が斬首臺の前へ引き出された。黑衣を着た老女がその細い手に縋つて止め度も無く泣き頽れてゐた。天使のやうな白衣の少年が二人そこに跪づいて祈つてゐた。この小さい命が先づ消える可きであつた。十一二歳とも見える年上の少年が靜かに立ち上つて美しい人に別れを告げた。その柔かい頰にはほのかに微笑みが浮んでゐる。美しい人と老女とは止め度も無く泣いてゐる。聲も無くさめざめと泣いてゐる。處刑者の巨大な手に重い斧が光つてゐる。少年は溫かい床に眠りに行く者のやうに、その白い細い首を斬首臺の上へ横へた。私は自分が囚人である事も忘れて聲を放つて泣かうとした。その時眼覺めたと思ふ。其夢は餘りに鮮かな印象を止めたので當時梗概を書き止めておいたが、いつか失つて仕舞つた。今倫敦塔をみて其時の記憶が甦へつて來たのである。

「塔」といふ名に依て高く聳える一つの高い建物を想像してゐたが、來て見ると幾つにも分れた廣大な城廓である。天守閣めいた處も二三ある。中庭に横はる冷い石は曾て高貴な女性の血に染められたと云ふ。今に春が來たら此あたりにも優しく草花が匂ふであらう。

晩春から初夏へかけて倫敦は眼が覺めるやうに美しいと云ふ。今は先きを急ぐ身である。再度の訪問を約して私は三月八日に巴里へ向ふ事にした。

花の都

巴里

一

ドオヴァーが荒れて船が出ないといふので更に一日を倫敦で暮らした我々は、偶然にもプリンセス・メリイが蜜月の旅に出る列車と數分を隔てゝ同じ方向に駛る事となつた。プリンセスの旅粧は極めて質素に見えた。忠實な騎士の樣に子爵（ゲアイカウント）が其傍に立つてゐた。群衆は帽を振つてこの幸福な人々を見送つた。靜かに、音樂も儀仗兵も無く、たゞ心からの祝福を以て見送つた。それが私には嬉しかつた。

音に聞くドオヴァーの渡しである。私共はまた藥餌を澤山に用意した。荒れた後で風もあり、浪も高からうと惧れてゐた。然し拍子抜けがする程早く穩かに對岸へ着いた。船中で食事までした。船が汚なく、設備の惡い事を攻擊する餘裕さへ持つてゐた。「公用（オフィシャル）」とあつて行李に錠をおろしたまゝ無事に通過した。それから大陸の列車の貧弱な事を語り合

つた。悪口を云ふには日本語が一番便利である。「馬鹿」といふやうな言葉は大分世界的になりかけてゐるから慎まねばならぬ場合もあるが、卷舌の江戸辯か水飴のやうな上方辯でやれば、少々日本話を聞き噛つてゐる外人がゐても分りつこは無い。夕方巴里へ着いてみると、どう行き違つたか、當にしてゐた出迎への人々の姿が見えない。赤帽に急ぎ立てられて自働車に乘せられて仕舞つた。何しろ佛蘭西語は苦手だから、落ち着いて談判する餘裕は無い。何處かのホテルに部屋が取つてあるのだらうが見當がつかない。そこでよく日本人が行くといふ「オテル・アンテルナショナアル」といふのへ駛らせた。生憎雨が降つてゐる。つい停車場の近所だと聞いてゐたのに中々着かない。薄暗い街を幾曲りもして段々淋しい方へ行く。「少し怪しいぜ」と私はA氏に云つた。「巴里は危險ださうだ」とA氏が眉を顰める。「かうして乘り出した以上は生きて歸れる積りでゐると間違ひだ」と私は大きく云つた。その辯命は惜しいのである。「暗黑の巴里」、「巴里の祕密」と云つたやうな物凄い本の名が腦に浮んで來る。

然し無事に宿へ着いた。ホテル名簿にも餘り載つてゐないやうな下宿屋式のところである。後で聞くとN氏が偶然にもこの宿をレザアーヴしておいて呉れたのである。日本語を話す番頭が出て來て盛に愛想を振りまく。オリムピックで一緒だつた、若い元氣の好いI君と同宿だと云ふ。急に勇氣が出た。恐らくこのホテルで最上等の部屋へ通される。すつかり落ち着いてみると俄かに空腹を感じ出した。I君がやつて來る。三人で食堂へ行く。葡萄酒の甘さは格別である。無暗に亂暴な佛語が使つてみたくなる。巴里の雨の夜は淋しい。

巴里の滯在は中四日であつた。グランド歌劇も見ず、ルウヴルは生憎月曜で閉つてゐるといふ始末で、何等誌す可き事も無い。四日の見聞でこの世界の樂園、文化の中心と呼はれる所謂「花の巴里」を批評する程私は大膽では無い。いづれ、マロニエの花さく頃ゆつくり再遊して染々その獨特の柔かい甘い長閑な空氣に觸れたいと思ふ。その時には多少この國の言葉にも親しみ、また獨逸文化との比較の基礎を作つておく事も出來るであらう。

けれども既に「倫敦」を書いた私は釣合上幾分なりとも「通行者」としての印象を書き止める責任を感じる。やがて自分で其誤りを訂正する機會が來るであらう。

二

紐育、倫敦から來てみて、矢張巴里は淋しいと云ふ外はない。ブロオドウエーの光りの渦卷きを見た眼には何處の都大路も薄暗い。獨逸の劇評家アルフレッド・ケルルが紐育の印象を書いた中に「紐育は巴里のやうに藝術的に最も快活な、最も憧憬的な印象は與へないが、然し最も眼覺めた、最も動顫的な印象を與へる。誠に新しい世界である」と云ひ、「ブロオドウエーーー三十基米突に亙る大通りだ。デンホッフ廣場からボッツダムまで屆く。それが紐育市の一部内に在るのだ」と云ひ、「タイムス方街（スクエヤ）」邊の絢爛な白熱的な電飾に驚嘆の眼を瞠り、ウルオース閣（獨逸でも摩天閣（ウオルケンクラツツア）と呼んでゐる）やマンハッタン通りの高樓を讃美して、かういふ偉大な豪壯な建物を見ない者には「建築術の究極の歡喜が拒まれてゐる」と云つてゐる。そして最後に高調して「苟くもこの米國人、この光輝ある若き國民に所謂文明（Zivilisation）のみを承認して、文化（Kultur）を否定する者は不治の近視に罹れる者だ。個々の點の代りに輪廓を見る力が缺けてゐる」と結論を下してゐる。勿論私はこの説に贊成する事は出來ない。成程、所謂表現主義の立場から、あらゆる傳統を缺いた、自然に根ざすやうな强大な力の發現を讃美する心持ちは理解し得られるが、同じ「量の美」でも米國のそれと希臘、羅馬又は埃及、支那あたりのそれとは其精神に於て全然相反してゐる。私の考へでは質量の孰れを問はず、その物が「實用」の意味を缺くか、或は之を超越してゐる時に初めて美感を生ずる。「觀せ物」となつたナイヤガラに莊嚴美を感じ得なかつたのは當然である。たゞ輪廓のみを見て其精神を見ない者も亦不治の近視に罹る者と云はねばならぬ。市俄古の「マアシャルフイールド」は建築として實に偉大なものであらう。伯林の「ウエルトハイム」も當市屈指の美しい建築だと云はれてゐる。けれども、それがデパアトメントストアである時、其樣式そのものに於て既に實用の精神が入つてゐる筈である。さもなければ當然不調和の感を與ふ可きである。精神から樣式が生れるものとすれば兩者の關係は内在的のものでなければならぬ。そして紐育邊の大建築は悉く皆實用的精神に適合し、極めてよく調和してゐる。そして實用的意義を超越してゐない。ウルウォースが倍の高さになつて百階に達しても、あの精神から生れてゐる限

り私は何等の美を感じ得ないであらう。タイムス方街（スクエヤ）の光の海はボオドヴイルや活動小屋や商店の電飾である。果してそれを熾烈な精神の發現と名づける事が出來るであらうか。情熱の象徴と見うるであらうか。「富」も亦力である。大なる力である。暴君の持つやうな力である。それが羅馬を焔の海に化するやうな時には確に一種の破壞的美を發現するに相違ない。然し單に實用的精神から一つ一つ積み重ねて行つたやうな時に果して壯美を生み出すであらうか。私はケルルが紐育を讃美してゐるのには大反對である。然し、それにも係はらず、紐育を見た眼には倫敦も巴里も物質的の立場より云つて非常に貧弱だと言はねばならない。何となく暗い感じがする。淋しい、田舍染みてゐる。それだけに又美しいのである。

凱旋門へ登つて眺めた巴里は清らかで麗かであつた。シャンゼリゼエの並木路の柔か味と其燈火の美しさは友人O君の云ふ通り、恐らく世界に比が無いかもしれない。セイン河畔からノオトルダムを仰ぐ風情も忘れられない。

三

「オペラの廣場」は寫眞で見た方が美しい。バンテオンは偉大だ。然し、華盛頓府のリンコルン記念像（モニユメント）を見た時の方が一層驚嘆した。凡て生々（なまなま）しいが、米國はかういふ方面にも素晴らしい物を作らへてゐる。或は作らへつゝある。ロダンの博物館を見る事が出來たのは嬉しかつた。バンテオンの前にあつた筈の巨大な「考へる人（バンセエル）」の像が此處にも無い。小形のがある。朝日新聞の陳列で見てゐるから餘り驚かない。習（エスキイス）作も日本で見たときの方が難かつた。凡て本場へ來て見ると贅澤になつて一眼では驚き象ねるやうだ。一つには英米で可なり多く見て來たからであらう。ゆつくり其土地に落ち付いて靜かに鑑賞しなければ駄目だ。唯今迄寫眞で見て其大きさの見當がつかなかつたものを實物に照らし合はせて想像の誤りを正す事が出來るのは嬉しい。「接吻」と「バルザツク」は略想像通りであつた。「ユゴオの像」もさうである。中には思つたよりも小さいのがあつた。ロダンの油繪は始めて見た。

佛蘭西近代派及現代派の作品も少しは見たが、何しろルウヴルが閉つてゐたのだから美術の方面はすべて次の訪問の時に纏めて書く事にする。一體私の見物の仕方は全く行きあたりばつたりで頗る亂暴だ。もう少し準備をして行かないと損だと知りながら、それをするのが又臆劫でならない。心懸けの好い人は日本に座つてゐて世界中の事を何もかも知つてゐるのだ。獨逸へ來て少し心懸けをよくしようと思つたら今度は落ち着き過ぎて何も出來なくなつた。

巴里で一番感心したのはヴエルサイユ王宮である。N君に案内して貰つた。全く壯麗無比である。それも内部の歴史的の事はN君が專門的に話して呉れたのに係はらず忘れて仕舞つた。ポツツダムへ二度まで行つてまだ内部は見ないやうな始末だ。すべて歴史と地理との知識は重い石のやうに私の心を壓する。學校の試驗でもこれに一番苦しめられた。ごうかして自然に分つてくる工夫は無いものかしらと思ふ。庭園(ジャルダン)の雄大な規模と典雅な結構とには悉く心を奪はれた。もつと好い季節に來たらどんなに美しい事であらう。所謂林泉の美なるものゝ極致と云ふべきだ。およそ「並木(アレエ)」の粹は佛蘭西に集まると云つても過稱ではあるまい。鬱蒼たる森林の趣も亦巴里へ來て初めて染々味はふ事が出來た。「森(ボア)」をドライヴしたときの印象も忘れ難い。「自然」に惠まれた國だといふ事を思はせられる。リュクサンブルグの公園で椅子に腰をかけて少年少女の遊戯を見てゐるとき、カフエの張り出しに休んで往來を眺めるとき、「オラムピヤ座」で幕間に珈琲を飲むとき、巴里は遊樂の巷だといふ事をつくづく感じる。呑氣で好いなと思ふ。同時に亡國の兆だとも思ふ。そして糜爛し頽廢し切つた暗黑面を一眼覗くとき、巴里は戰慄の都だと思はざるを得ない。

巴里の男女は皆「藝術家」のやうに見える。少くとも「都會人」である。米國人は「商人」、英國人は「紳士」獨逸人は「田舍漢」或は「役人」と云はうか。そして私共は何處へ行つても「小さいヤップ」である。然し外國に半年以上もゐると、もう「人見知り」をしなくなる。レストランで正面に見詰められても平氣になる。米國では婦人の顏を永く眺めてゐると告訴せられると云ふ事だ。巴里や伯林で傍にゐる客に自分の顏を穴の明く程眺められると一寸決鬪を申込みたくなる位不愉快だつたが、今ではさういふ不躾の人間に構つてゐる暇は無くなつた。向ふでも無代(たゞ)だと思ふから何時までも見てゐるのだらう。物價騰

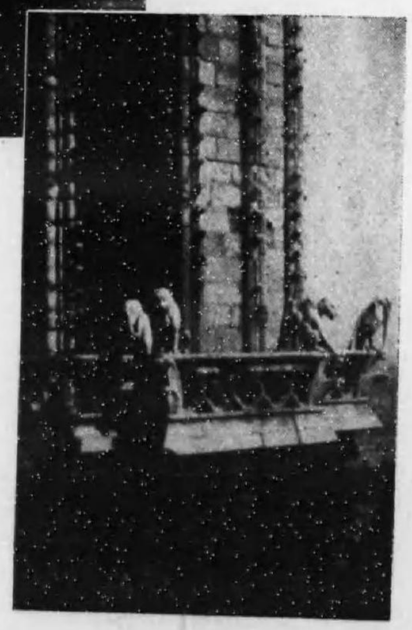
貴の際その位の法樂はさせてやつても宜い。一般に禮儀作法の八釜しい點、男女の服裝の整つてゐる事はやはり米國が一番であらう。勿論實業家式にリファインしてゐるので、色彩の感覺などは一向缺けてゐるやうだが、夫でも惡い感じは與へない。歐洲へ來ると凡てが亂雜だ。物見遊山の客が多く入り込む爲でもあらう。兎に角大西洋を渡ると一ずつと氣が樂になる。從つて風紀の點に於ても海を渡ると驚く程弛緩してゐる。ブロオドウエー邊りにも勿論怪しい女が澤山徘徊はしてゐるが、ピキャデリイへ來て、それが餘りに公公然と行はれてゐるのに呆然たらざるを得なかつた。米國はともかく表面上この點は餘程嚴しいらしい。倫敦の巡査の如きは何等の取締もしてゐないやうだ。女の風紀巡査といふのがゐるやうだが、その中には更に風紀係を附ける必要を感ずるのがあると云ふ。巴里はこの點で本場だと認められてゐるやうだ。成程、性的頽廢が徹底的に峻烈に行はれてゐる點では天下に比が尠いかも知れない。然し、倫敦を經て來ると餘り驚かない。道義的なる可き所謂紳士國の英國がこの點であれ程亂れてゐるとは全く意外である。戰後の獨逸殊に伯林は風紀が極度まで惡化してゐて、往來を往くと白晝でも怪しい女が蝗の樣に飛びつくかの如く噂せられてゐるが、來てみると案外である。殊更にさういふ區域を徘徊しない限り、まづ女難の虞れは無い。「一度話の種にさういふ目に逢つてみたいと思つてゐるのですが、一向に駄目です。一體そんな女がゐるのですかなあ」と或人は如何にも心外さうに云つた。居る事は居るに違ひないが、なにも「護符」を腹卷へ入れて來る程の事は無い。

「寫眞機」を携帶して歩く者は大抵日本人か支那人だと思つて差支無いと云はれる程撮影熱が我々の間に蔓延してゐる。私は日本では一度もやつた事がなかつたが市俄古で手習ひに小さい機械を買つた。無論何等の研究もせずに無暗に寫してみた。ナイヤガラで大膽にも大瀑布をカメラに收めようとして霧のために全然失敗に終つたのを始めとして今迄失敗に失敗を重ねてゐる。「オリムピック號」、「ヴエルサイユ」邊のは悉く眞黑になつて現はれた。唯、ノオトル・ダムの怪物を撮つたのは可なりに成功してゐる。あの頬杖をついて巴里の街を見下ろしてせゝら嗤つてゐる横着な奴を始め、象の鼻、鳥の嘴をした不思議な奴、殊に人間の軀體を鹽もつけずにむしやむしや喰べてゐる物凄い奴などは鮮かなものだ。總じてこれ等の怪物は甚だしく私の氣に入つた。何か六づかしい意味があるのだらう

が、それは知らなくても非常に面白い。あれを見るだけでも巴里へ行く價値はある。

四

凡ての話は大抵「喰物」に落ちるといふ原則に從つて少しばかりその方の事を書く。一體に私は味覺が發達してゐない。東京に生れた爲めか、何でも淡泊した、貧乏人の喰べるやうなものが好きだ。納豆、鮭、鱈、海苔、胡麻鹽と云つたやうな、凡て滋養分に乏しいものを好む。殊に香の物が大好きである。それが得られないだけでも西洋は困る。朝飯は矢張米國が一番甘いやうた。之については伯林の新聞に誰かゞ書いてゐた。果實が豐富なのと、オートミイルの類ひが幾種もあつて、輕く甘く喰べられる。殊に「グレエプ・フルウト」といふ夏蜜柑のやうな果實がよく朝のテエブルに供へられる。鰻の調理法は日本殊に京阪地方の方が遙かに進んでゐる。一般に「料理法」にかけては日本や支那が世界でも一番優れてゐるのではあるまいか。殊に日本のは色彩美の要素が巧みに取り入れられてゐるやうだ。我々は一箸づゝ幾種類もの食物を錯綜させて味はふところに食事の趣味を感じ



巴里ノオトル・ダアムの怪物

る。それが西洋へ來て必ず一皿づゝ片づけて行かねばならないのは食慾を減退させる主因である。然し巴里の「食前小餐（オードヴーブル）」の纖巧な調理法と變化ある取り合はせとには感心せざるを得なかつた。葡萄酒の甘さは前にも書いた。美酒佳肴といふ言葉は巴里へ來て始めて用ゐらるべきだ。名物の「蝸牛」も馳走になつたが、日本の鰻の肝の方が甘いやうだ。「菓子」は公平に見て日本の方が遙かに甘く、又種類が多い。下戸黨の某氏は伯林の菓子の不味さに「悲鳴」をあげると云つてゐた。尤もこの人はよく悲鳴をあげる人である。外國に居ると一つひ人間が卑しくなつて兎角喰べ物の話が出る。然しこの方面で殊に鈍感な私は何にも云ふ資格は無い。米國では殆ゞすべての日本料理が、しかも日本よりはずつと安く喰べられる。米國の材料を用ゐるからだ。その代り「大味」である。そして「チャプ・シュイ」と稱する支那人の料理屋が無數にあつて大繁昌である。「極東園」、「赤龍園」などゝ號して納まつてゐる。倫敦にも相當の日本料理店が數軒ある。支那料理は二三軒しかないやうだ。巴里では日本人倶樂部があるだけだ。伯林には戰後日本料理屋らしいのはまだ一軒しかない。それも最近開れたのだ。材料の購入が困難なのと、借家難とのために誰も手を出

さないのであらう。西洋にゐると食事をしに一々出てゆくのが臆劫になる。ほつ然と外人の間に挾まつて毎日變化の無い、脂切つた物を喰べねばならないのは一種の苦痛である。米國では女の給仕する處も多いが、概して恐ろしくつんとしゐる。偶然に御世辭が好いとお婆さんである。歐洲は男給本位らしい。伯林では憔悴したカイゼルの樣なのや、ビスマルクの異腹の兄弟のやうなのが愛想よく給仕する。あまり歡迎されると例の「爲替相場」の爲だと思はれて嫌になる。そして凡てこれ等の給仕人に一樣に「給仕長殿」といふ敬稱を奉るのは可笑しい。南獨では女給も可なり多い。米國に二十年餘もゐる日本人に料理店で「おい姉さん」と呼ぶのは何と云つたらいいでせうかと訊ねたら、一寸困つた顏をしてゐたが「まあ、やはり、Sey!と云ふんせうな」と答へた。多くの場合ナイフの柄か何かで信號を送るらしい。獨逸で電話交換手にも「嬢」とか「親愛なる嬢」とかいふタイトルをつけるのは氣に入つた。器物や腮などを用ゐて人間を呼びつけるのは甚だ宜しくない。然し獨逸人が一々タイトルを冠せて人を呼び、その夫人にまで及ぼすのは小蒼蠅い。英の「サア」よりも更に美しく響くのは佛の「ムッシエー」である。

友人達に非常な迷惑をかけた後私達は嵐のやうに巴里を去つた。早朝私達の列車は獨逸へ向つて動き出した。汽車の設備は甚だ貧弱で薄汚い。おまけに私達は寢臺を取る事が出來なかつた。若いI君は無暗に脚の長い人である。これが向側の腰掛に長々と眠てみると こつち側の二人は海老の樣になつて夢現の境を往來する外は無い。尤もI君は多少病氣であつた。「禁煙」といふ事が佛語で窓に貼付けてあつたが、車掌に少し「フラン」を摑ませたら早速「喫煙」といふ札と貼りかへた。煙草だけに聊か煙に卷かれた形であつた。「ケルン」では「公用」とあつてフリイバッスで濟んだ。

伯林のフリイドリヒ通驛へ着いたのは三月半ばの早朝の事である。KとSとが出迎へて呉れた。不取敢向側のホテルへ投宿した。二日を經て私はシャルロッテンブルグの宿へ移つた。旅から旅へと絶えず落ち着かない日を送つて來た私は獨逸へ着いて俄に疲れが出たやうだ。それに英米で渇えてゐた「芝居」が私を待つてゐた。一箇月餘りは全く芝居見物に沒頭して仕舞つた。その中に「奇しく美はしい五月」が來た。私の足は自から郊外へ向つた。美しい青葉と靜かな湖水と春の歌をうたふ小鳥とが私を迎へた。大學では新學期が

開かれた。市中を見物する暇も興味も無くなつた。「伯林」といふ市に就て一般的の印象を書くべく餘りに材料が乏しい。

追記。今日では巴里に「常盤」と云ふ料理屋が出來、伯林には日本料理を喰べさせるところが四軒になつた。

ライラツクの花咲く頃

伯林及近郊

一

復活祭の聖金曜日（オスターフライタツハ　カアルフライタツハ）は丁度四月十四日にあたつた。それまで兎角陰慘な寒い日が續いて白いものが時々落ちて來たのが此の日は俄に春めいて草木が一時に眼覺めたやうであつた。春といふよりもいつそ初夏といふ季候で伯林の男女は一夜の中に面目を一新して綠と青と鼠とが色彩の基調を成した。柔かい若芽がほのかに匂ひ、小鳥が囀り交はしてゐる。教會へ行く老若男女の顏にはしめやかな喜びが浮んでゐた。昔基督が十字架に上つたと云ふ最も悲しかる可きこの日に何といふ自然の和みであらう。何といふ平和な麗かな天地であらう。それは曾てパルシファルが驚異讃嘆の眼を睜つてグルネマンツに問うたところであつた。罪人の灑ぐ懺悔の涙が露となつてしとしとと草木を霑すのである。限り無く悲しく

もまた限り無く喜ばしき日である。更生を豫覺せしめる日である。一八五七年のこの日にワグナアはチューリヒの別墅から花咲く野邊を眺めて「深い同情の吐息」に似たものを聞いたと云ふ。恰も冬と春との境にこの聖日が横はるといふ事には甚深な意義が含まれてゐる。自然の更生と人類のそれとが呼應融合して美しい一編の詩を生み出すこと恰も釋迦の降誕會に於けると同一である。

下宿を出てサヴィニィ廣場（ブラツツ）から動物園（ツオー）の方へ逍遙しながら、私は「自然の恩惠」とも云ふ可きものを染々感じた。今夜は劇場も樂堂も嚴肅な物だけを擇んで上演する習はしである。オペラ座では當然「パルシファル」が演ぜられる。曾て紐育のメトロポリタン座で見た美しい崇高な場景が眼の前に浮んで來る。然し、格別の理由もなく、私は「小劇場」（Kleines Schauspielhaus）でゴリキイの「夜の宿」を見た。グルツルード・アイゾルトの「ナスチャ」に心を牽かれたからでもあつた。「エレクトラ」や「サロメ」に扮して異常の成功をした彼女はその情熱の力と神經の顫へとでこの夜も觀客の心を捉へた。けれども全體としてこの演戯は不滿足な結果に終つた。「ペペル」、「サチン」、「役者」、「巡禮」、「錠前屋」、「亭主」等の個性が鮮明を缺き、所謂「息の合はぬ」憾みがあつた。日本で自由劇場の上演を見た時の方が深い感銘を與へられたやうに思ふ。舞臺も「モスカウ座」のそれを想像してみると著るしく深刻味を缺いてゐた。この夜を限つての「一度の上演（アインマアリゲ・テウフフユールング）」である丈に稽古が不十分な點もあつたのであらう。それは兎も角この意味深い日に人生の慘苦と救濟の光明とを描いたこの力強い作に接した事は忘れ難い事の一つでなければならぬ。

その明る晩にはKSと一緒に「獨逸歌劇座」でワグナアの「工匠詩人（マイスタアジンガア）」を見物した。ワグナアの博大な愛の力と深遠なユーモアとが溢れてゐるこの作は私の心を更に明るい暖かい世界へ導いた。殊に「フリーダの獨白（モノローグ）」の幽婉な場面と大詰の「ヨハニス祭」の美しい晴やかな舞臺とが春と夏との訪れの暗愁と愉悅とを感ぜしめた。菩提樹（リンデン）、栗樹（カスタニエ）、楡（ウルメ）、槲（アイヒエ）と伯林の街路樹の數は多い。「皇帝並木（カイザアアレエ）」の邊は殊に鬱蒼として五月に入ると綠の色が日に日に濃く深く、葉は彌が上にも繁り合つて天日を蔽ひ隱し街上に涼しい蔭を投げる。其間に李、木蓮、桃、木瓜の類が咲き亂れ、數多い廣場（ブラツツ）には空から降り滾れたやうに黃紫の菫や繼母（シュティフミュッタア）草（ヒエン）や忘れな草などが匂ふのである。最も散文的（プロザイック）のやうに云はれる伯林も春か

ら夏へかけては寔に美しい都である。「乗合自動車（クラフトオムニブス）」に乗つて「選帝侯通（クウルフュルスツンダム）」から「菩提樹下街（ウンタア・デン・リンデン）」へ出る道筋に車はシュプレエ河に沿うて「ボッツダム橋（ブリユッケ）」を渡る。あの對岸に生繁る栗（カスタニエン）樹が枝も撓わに白い花で飾られるこき、吾々は市中に居ても「奇しく美しき五月」こ歌つた詩人の心を解する事が出來る。

何の國でも新綠の時は短い。青春の過ぎ易い嘆きは古今東西を擇ばぬ。柔かく軟やかに幽かにも匂ふ若葉の時は千金よりも貴い。私は劇場を去つてしばらくは森林こ湖水こに親しまうこした。三月半に巴里からこの都に着いて以來貪るやうに劇界の濃厚な空氣を吸つて萬事を忘れてゐたが、何時こはなしに長い旅の疲れが出て、一種懶い氣分に捉はれて來るやうであつた。市俄古、紐育、勃斯頓、費府、華盛頓こ行李をほごいては又纏め、果ては太西洋を渡つて倫敦へ着き、始めて歐洲の文物に接し、間も無く巴里に移つて頽唐の氣分を味はひ、日本を出てから足かけ半年目で漸く目的地なる是の伯林に落ち着いたのである。先輩は暫時休養するやうにこ勸めて呉れた。それでも、今迄醫する事の出來なかつた觀劇熱が不可抗的に私を劇場へ引き摺つて行くのであつた。この「季節（シーズン）」を徒らに過ごす事が惜まれた。然し、演劇の「季節」にも增して心を牽くものは矢張自然のそれであつた。一方には神經の疲勞から「名も知れぬ懶さ」に罹る事を恐れた。私は野こ水の方へ出て行つた。

「グルウネワルド」が伯林から一番近い散策地である。別莊めいた建物が樹の間から覗ふ可きものがある。森が遠く「ワン湖（ゼエ）」の方まで續いてゐるらしい。處々に小さな湖水こも云郊に日曜や祭日に行く事は禁物である。假令寶塚、箕面、濱寺邊程の雜沓は見なくこも、異人の間に挾まつて塵埃を浴び好奇こ怪訝こ折々は嘲笑の眼を以てさへ迎へられる事は堪へ難い。然し森は何こ云つても隱れ家である。獨逸ほご森に富む國は尠いこ聞く。この邊のは勿論まだ大森林の俤は無いが、日本の都會から來てみるこ珍らしい。新綠の森の香りこ小鳥の聲こが疲れた神經を靜めて呉れる。水邊のカフエーの庭園で珈琲を飲み、古い詩篇なごを默讀してゐるこ時處を忘れて落ち着いた氣分になる。淋しいがまた樂しい。

薄倖の詩人クライストが愛人こ情死を遂げた「ワン湖（ゼエ）」では舟を浮べてみた。帆船の名

が「アリアドネ」で船頭が「波浪（ウエルン）」といふのは可笑しかつた。無論琵琶湖程雄大な眺めは無いが「ボッツダム」の方へ通ふ小蒸汽が靜かに波を分けて行く姿から「小ワン湖（ゼエ）」へ入つて河川の趣に移つてゆく心地が遠い志賀の海を想はせるに十分である。帆船を棄てゝ自分で端艇を漕いでみた。恐らく始めての試みではあつたが、子供の時千住邊で和船を操つた經驗があるので割合に樂に行つた。兩國の狹い掘割を通つて龜井戸まで漕いで行く途中幾度か外の船に突き當つて船頭に怒鳴られた事を想ひ出す。遠い遠い少年の夢である。昔から私は水が好きであつた。泳げない癖に船が好きだ。荒川堤の下を悠々と漕いで行つて櫻草の咲き亂れる野原で半日を友人と過ごした事も度々あつた。船の面白味と長閑さとは和船でなければ味へない。莫蓙の上へ仰向に臥て青空を眺めながら雲と共に動き水に從つて流れる心地は狹くて不安定な西洋の端艇では考へられない。屋形船の軒提燈、浪に搖んで溶ける三味や太鼓の音、夜釣、夜網船の篝火、川開きの時船で摘む枝豆の味……矢張日本が好いなと思ふ。兎角現在に滿足せず、過去を懷かしみ、未來を夢み結局話が喰物に落ちるのは異境に在る吾々の癖である。然し「小ワン湖（ゼエ）」の美しさは正に瀨田川を凌いでる。兩岸にある別墅（ヴィラ）も物々しく殺風景なのは尠く、概ね皆雅致に富み、庭園も奥床しく清楚なのが多い。一面に綠の芝生があつて處々に美しい花壇をしつらへ、四柯家（ラウベ）に蔦を搦ませたのも嫌味にはならぬ。水際に椅子を据ゑて詩集めいた書物に讀み耽る金髮の人がある。櫂（オール）の手を休めて「今日は！（グーテンターク）」と云つたら、「おや、よくいらつしやいました。まあ御上りになつて珈琲でも一つ如何？ゆつくりなすつても好いのでせう。その中に月が出ませう。夕方から夜へかけて如何に美しいでせう」とでも云つて呉れさうなものだと思ひながら漕いで行く。兎角異國は淋しい。

二

「クライストの墓」は忘れられた姿で、荒廢の趣を呈してゐる。枯れ果てた花環が一つ、新しい鐵柵が却て神聖を損なふ。「力に於て比肩すべきもの稀に、不幸に於て及ぶ者絶えてなし」と詠はれた彼は今も猶逆境を脫し得ないやうに見える。最近名優カインツの墓所の閑却せられつゝあるのを嘆いた一文を新聞で讀んだが、ワン湖畔に眠る薄倖の詩人の爲め

に訴へる人は無いのであらうか。「ワイマアル」の侯爵家の墓地の君公と並んで壯麗な石棺の中に靜に眠るゲエテ、シラア兩詩聖に比して死後の待遇上何たる逕庭であらう。固よりクライストに取つてはかうしたさゝやかな埋もれた墳墓がその人の性格と境遇とを偲ばせるのにより適してゐるのかも知れない。吾々は敢て大理石像を彼に對して望むのではない。唯温い心と一掬の涙とを求めるのである。それは誠の墓は畢竟人の心に横たはるからである。死者は心の墓の内に永く生きる。其處に安らかな臥床を見出す。人の心が冷たく凍り果てるとき彼等は悲しげに首を振つて常闇の夜へさ迷ひ出づるのである。

ワン湖のほとりほの暗き葉蔭に
草に埋もれて靜かにも眠る
われ等が詩人ハインリヒよ。
枯れたる花環に
はら〳〵と降るは露か、涙か――
白き花、青き花はつかに香ふ、
いづれの遺骸より咲き出でし花ぞ
ハインリヒ、ヘンリエテ――
その名は忘らるとも、
流しゝ血より
春毎に花は咲かむ、
年々に鳥は歌はむ、
「自然」こそ永劫に
渝らざる母、誠ある友、
その廣き暖かき胸に
安らかに眠れ、
いたましく、いとほしき、
わが二つの靈よ。

ライラックの花咲く頃

「かく歌念佛して弔ひ候へば」と謠曲「松風」の氣分になつて夕暮の小徑を辿りつゝある旗亭（レストラン）で靜かに晩餐をしたゝめた。湖水の方から吹く風が肌に泌み徹る樣であつた。三井寺か興聖寺かの鐘が今にも響いて來さうな氣持がした。

フリイドリヒ大王の「無憂宮（ナンスウシイ）」の在る「ポツツダム」は伯林近郊で最も美しい市である。宮殿と禁苑との規模は其原型（モデル）とも云ふべき「ヴエルサイユ」に比して小さくはあるが、其位置と結構とに於て勝るとも劣りはしない。殊に春から夏へかけての新綠の美と數知れぬ草花の麗しさとは譬ふべき物も無い。餘りに美しい周圍の眺めに恍惚として宮殿の內部を觀る事を忘れた。若葉は移ろひ易く、花は餘りに早く散り去る。櫻花の名所として聞える「ヴエルダア」の方へ水路を下る。船から眺める兩岸の風光がまた想像以上に美しい。殊に夕暮は落日に彩られて雲と水との色が無限に變化し、薄靄に包まれた黑い森が淡く煙り、行きかふ小舟が忽ち眞紅に忽ち紺靑に染められ、滑かな襞を疊む波の迂曲が平和な靜寂な旋律を奏でる。遙か彼方の民家の前で誰かゞ「五月火（マイフオイヤア）」を焚いてゐる。古い日耳曼の風習に從つて神に捧げる火だと聞く。その朱色の焰が眞直に空に立ち昇るのを見てゐると孟蘭盆に焚く「迎へ火」の事が思ひ出された。

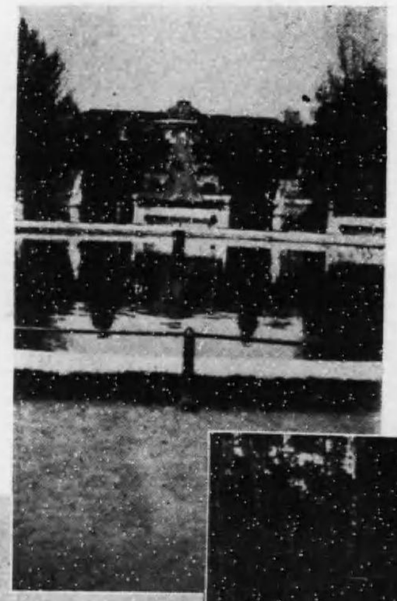
櫻花の場所は「比公丘（ビスマルクヘーエ）」といふ小高い丘の上に在つて雜沓を極めてゐた。恰も「紀三井寺」といふ感じである。櫻樹は矮小（わいしょう）く低く垂れて「御室」のそれに似てゐる。然し色は白く梨か李に近い。日本の櫻花のやうに華麗（はなやか）な輝かしい氣分は生じない。それでも此土地の男女は名物の「櫻酒（キルシュ・ヴッサア）」に醉つて盛んに浮れてゐる。人眼を厭ふ戀仲は更に櫻畑の方へ上つて行つて繁みの蔭に寢轉んで甘い密語を囁き交はす。家族で踊つてゐるのもある。酩酊して蹌踉と歩き廻る婆さんも見受けた。樂手が來て何か曲の所望は無いかと訊ねる。日本曲は知らないが　墨西哥の歌とかを奏すると云ふ。兎に角酒錢さへやれば宜いのである、全體の氣分が「平野」、「御室」の夜櫻といつた風情である。小さく塊つてゐるところが似てゐる。「上野」や「向島」の樣に派手なぱつと明るい氣分は乏しい。何しろ片肌を脫いで緋縮緬の襦袢を見せると云つたやうな眞似は出來ない。思ひ切つて上衣を脫ぐとワイシャツの上へ十文字に筒袴吊が現れるのでは心細い。歸りの船の上でも音樂が奏せられた。露西亞邊から來てゐらしい若い男女がマンドリンに合はせて下手な歌を唄

つてゐた。

三

この外牧場の氣分が漂ふ「レエニッツ」や、植物園の在る「ダアレム」、そこから近い「シユラハテン湖」、又伯林の西端に位する「ピッヒエルスベルグ」なぞへ天氣の良い日を撰んでは遊びに行つた。そして森と水との風光に親しみ、時々は湖水に舟を浮べた。郊外に小さい隱れ家を探し出さうといふ欲望もあつた。然し結局は何處へ行つても落ち付かれない自分であるから市中でぢつとしてゐるか、いつそ靜かな遠い市へ移つてしまふかする外はないと悟つた。兎も角伯林の近郊は豫想外に美しく又比較的靜かである事を知つた。

いつしかあの「フリーダ」の花が咲き始めた。實はこの花と「ホルンダ」の花との區別が曖昧で「接骨木」と漠然譯してゐたが來てみると二つの花は全然別の物である事を知つた。俗に兩者を混同して用ゐる事もあるやうだが正しくない。「フリーダ」は「ライラック」である。近頃雜誌「表現」を手にして新村博士の「花の名三つ四つ」を讀み愈この事を確



ポッツダムの離宮

グリューネワルドにて

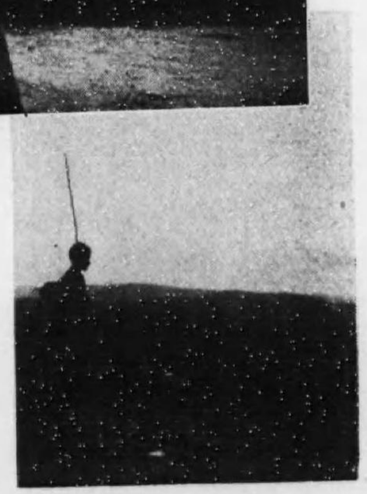
ワンの湖の船頭ウェルレ君

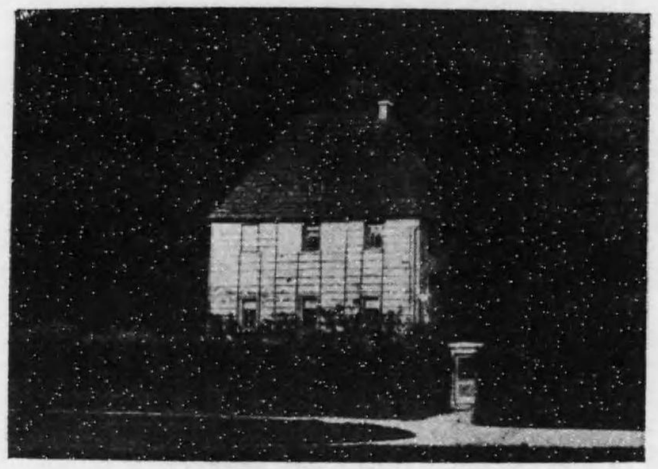
イェナの大學生

ウェルダの櫻花と櫻酒

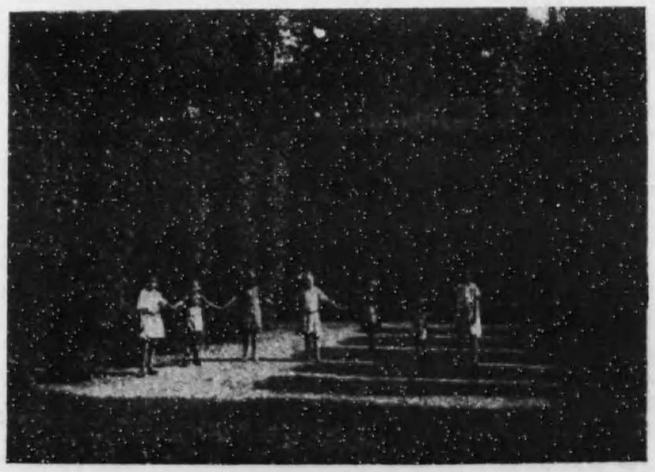
伯林近郊
シュプレエワルドの
自然と風俗

テューリンゲンの夏

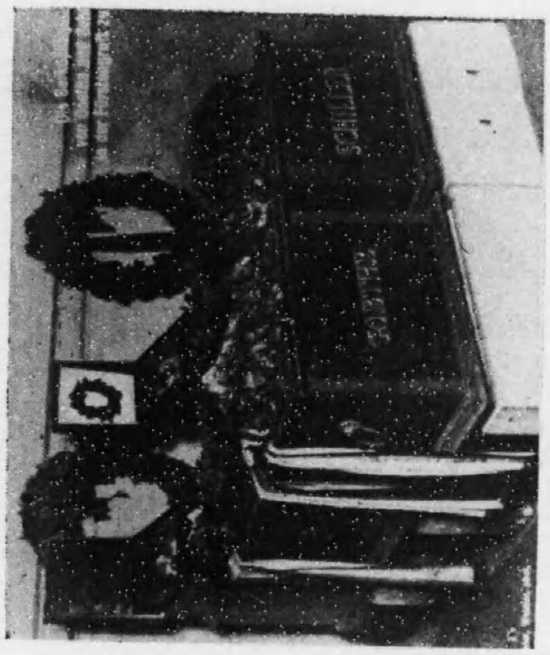




ワイマアルの「ゲエテ園邸」



同自然劇場



ゲエテとシラアの板（上）
ゲエテ終焉の室（下）

めた。それには有島氏の譯にかゝるホイットマンの詩さへ添へられてゐた――「高々と生ひ繁つてライラックの木叢は立つ、ハート形の濃綠の葉、空向きに、先きぼそりな、香の高いやさしい花」とある。新村、有島兩氏は共に私の親しい先輩である。兩氏が本國から遙に是の花を指して敎へて呉れたやうな氣がして嬉しかつた。例のハンス・ザックスの「獨白」の聯想もあつてこの花は一層懷かしい。始め白に紫に愼ましく咲くのを見て左程美しいとも思はなかつたが、「木犀にほふ日本の小春」を想はせると新村氏が云はれた、その甘く酸く、キュラソォの醉ひに似て一種の暗愁を伴ふやうな香りを嗅ぐと次第に心を牽かれ棄て難いものとなつた。純白な栗の花と藤色に白にしほらしく匂ふフリーダとは寔に獨逸國民の心の底に潜む「情意（グミュート）」から咲き出づる花でなければならぬ。一般にこの國の人が花を愛することは驚くばかりである。到る處に美しい花賣る家があり、紅紫黃白の花束を賣る女の姿を街頭に見る。カフエー、レストランの夜には屢々かうした男女の賣子に見舞はれる。女連れの客は最も色好き花を撰んで卓上のグラスに挿させるのである。恐らくこれは歐米一般の趣味であらう。鐵と石と煉瓦と電氣と瓦斯との中に住む都會人が一輪の花と

一頭の狗ごに於て失はれた「自然」を取り戻さうとするのは道理である。

ゲエテの足跡

一

聖靈降臨祭（フィングステン）の休暇を利用して私は大學の息苦しい講堂を出て、チューリンゲンの森の方へ出かけた。先づ「アイゼナハ」まで六時間の鐵路を駛る。沿道の風光が早くも私の心を捉へた。何ごと云ふ豐饒な野ごゝ鬱蒼なる森林であらう。大戰の慘禍ごいふやうな事は一場の夢ではないかごゝ思はれる。「アイゼナハ」の市も美しかつたが、更に靜寂な處を求めて直に「ワルトブルグ」までアウトで上る。ルタアの聖書飜譯で名高い史蹟の一つである。箱根の山道よりは餘程樂ではあるが、車がカアヴを廻る毎に谷が深く、森の色が濃くなつて行つて山氣が肌に逼る。秋は蟲の音が降るやうであらう。山の宿は「ホテル・ワルトブルク」ごゝ云ふ。知名の建築師に依つて「城（ブルグ）」ごゝ調和を保つて建てられたゞけあつて、まだ十年を經ないのに壁や瓦の色が古めかしく落ち着いてゐる。「城（ブルグ）」は直ぐ頭上に聳えてゐる。宿の窓からチューリンゲンの森ごゝ山ごゝを見渡す景色は心ゆくばかりである。

休暇を利用して「遍歷（ワンデルン）」する男女が群を成してゐる。「朝の麥酒」や珈琲を取つて樂しい、悲しい旅の歌をうたつてゐる。男も女も背嚢（ルックザック）を負ひ「旅杖（ワンデルシュタープ）」を突き、長い靴を穿いてゐる。學生は多く無帽で、上衣も無く、短い袴に輕い靴、空腹ごゝ日　燒けた胸を露はしたのが多い。中には炊事の鍋釜を携帶してゐるのもある。角笛（ホルン）を腰に吊げたのもある。かうして男ごゝ女は互に腕を組み、扶けあつて長い旅路を徒歩で驛から驛、市から市へごゝ漂浪して行くのである。子供連れのもあり許婚の指環を互の指に光らせたのもある。ワンデルン！何ごゝ譯すべきか私は知らない。「渡り鳥」ごいふ學生の旅行團がある。その渡り鳥に似て風の誘ふまゝにふごゝ漂泊の旅に出るのがワンデルンである。浪漫派の詩人に依つて好んで歌はれたこの自由な素朴な快活な羈旅の姿に私の心は強く牽き寄せられた。自分もあゝして野や山を彷徨ひたくなつた。行雲流水に身を任せて世の果の果までも行つてみたい。若い彼等は枝を曲げて雨露を凌ぎ、草の褥に假寢の夢を結ぶ事もあらう。「漂浪の

心」は由來獨逸人に特有である。美しい深い森が彼等を招くのでもあらう。荒漠たる草原が露西亞の男女を長い旅に誘ひ出すのと同樣である。中世期の徒弟(ゲゼルレ)が旅(ワンデルシュタープ)杖を携へて工匠(マイスタア)の家を歴訪した事も懷かしく思ひ浮べられる。其間に活きた修養が積まれ、身心が陶冶せられて行くのである。美しい詩と熱い戀も其處に育くまれるであらう。邂逅の喜びと別離の悲しみとが人生の無常と自然の永劫といふ意識に結び付くとき、あの甘き悲哀を伴ふ一種名狀しがたい「旅情」なるものが生れ出づるのである。しかも其感傷の境を脱却して深く深く自然の懷ろに入り、靜かに萬象の呼吸に耳傾けるとき始めて彼我一如、卽身卽佛の悟りを開くのであらう。ハイネの「旅の歌」とゲエテの「漂浪の詩」とを比較するとき自からこの間の消息を解する事が出來る。

二

かくしてルタアを眼の前に見ながら私はまづゲエテの足跡を辿る事にした。それは「井ルヘルムスタアル」といふ處に在る離宮で、カアル・アウグスト公が度々ゲエテと相携へてワイマアルから遊びに來たといふ瀟洒な「狩獵宮(ヤアクト・シュロッス)」である。大きい清い池があつて綠の芝生に種々(くさぐさ)の花が咲き、家鴨が遊んでゐた。そこまで行く道に「アンナタアル」といふ壑間を通る。冷たい溪流が脚下を流れ、山道は岩壁に壓せられて歩毎に狹まり、終に「龍溪(ドラッヒェン・シュルフト)」に至つて纔に身を側てゝ通ずる程になる。兩側の巨巖には青苔が厚く生ひ茂り、蔦葛が纏はつて、絶えず山水が滴り落ち、涼氣が骨に徹る。この薄暗い壑間を拔けて少し上つて行くと「日輪が岡」とでも譯すべき「ホオエ・ゾンネ」に達する。長夜の夢から覺め出でて日の光を仰ぐ心地である。樹の間から溪谷を隔てゝ遙に「ワルトブルグ」を眺める景色が何とも云へず美しい。こゝで麥酒を飲んでなほ森の道を辿つて「ヒルシュシュタイン」へ出ると更に眺望が豁ける。巨大な槲の樹が二本聳えてゐる。その下の腰掛に休んで眼前に展開せられたチューリンゲンの森の美しさに恍惚と見入つてゐると下の方から遍歴者の群がマンドリンやギタなぞに合はせて歌ひながら漸々近づいて來る。向ふの繁みの蔭では家族らしい一團が草の上に寢轉んでゐる。母らしい人が三人の子供を相手に鞠を投げて何か遊戯を始め出した。何處からとも無く鳥の聲が聞える。森の匂ひが身に滲

み渡るやうだ。「井ルヘルムスタアル」から「賃馬車」で「ワルトブルグ」の宿へ歸る。

「ルタア」が幻影に向つて投げつけたといふ「インキの痕」はいつの間にか古壁から剝ぎ取られて凹處ばかりが殘つてゐる。見物の男女が一片づゝ竊取つて行つたものらしい。所謂「ワルトブルグの歌合戰」の行はれた大廣間は頗る壯麗である。「聖エリザベエト」の間や其事蹟を語る壁畫も氣高く懷かしい。子を携へて城を逐はれて行く姿が憐れである。ワグナアはこの聖者の姿を取り入れて彼の「タンホイザア」の歌劇に作り上げた。「ワルトブルグ」は「靈」の世界であり、基督教的信仰の象徴である。そして「アイゼナハ」に近く横はる「ヘルゼルベルグ」が「肉」の世界を代表し、異教の精神を具象する「ヴエーヌス山」に擬せられてゐる。「歌人の間（ゼンガアー・ザール）」の大壁畫にはあの「夕星の歌」をうたつたと云ふエツシエンバハを始めタンホイザアに擬せられたハインリヒ・フオン・オフタアデインゲン、中世期の大詩人ワルタア・フオン・デル・フォーゲルワイデ等の姿が畫家シユ井ントの手に依つて描かれてゐる。その歌人の後方に首を鳩めて若いゲエテとシラアが覗き込んでゐるのは昔の壁畫家がよくやつた三世を一幅に縮め、畫面に時間を盛入れようとする試みからであらう。廻廊に在る男女の一生を禽獸に擬へた戯畫は罪が無くて面白い。獨立した看樓からアイゼナハの市を俯瞰する景色は壯大である。その欄干の一隅に刻りつけられ、書き記された無數の落書の中へ自分も日本の文字で一筆書き殘したのは、命あらば再びこの聖地を訪れようといふ希願が心の底に動いたからでもあつたらう。

それにしても大人格の力は水の如く光の如く山川草木の中に滲透して不滅の命を保つ事が切に感ぜられる。否、彼等の靈は「自然」それ自身にさへ生命を賦與しつゝあるのである。マウント・バーノンに華盛頓の家を訪づれた時にも深くこの事を感じた。人格は無盡の滋味である。

アイゼナハに二つの「ルタアの家」があつて互に爭つてゐるのは面白い。一つは今「太陽軒（ソンネ）」といふ旗亭の在る處である。昔の俤は全く失はれてゐるが、他の一つの「自稱（ソオゲナンデス）ルタアハウス」なるものの建築は實際古色蒼然として其門の如きは十六世紀の物だといふ。ルタアの室には胸像、筆蹟、鍵の類まで念入りに取り揃へてあり、某ドクトルの極めさへ附いてゐる。さうした由緒の色が塗り着けられてゐるなかつたら却て面白いのであらうにと

思ひながら、近くの樂聖バハの家を覗る。小さい庭園と歴史的で無い一脚の古椅子が一番氣に入つた。一頭の蛇が自分の尾を嚙んでゐる透し刻が面白い。澤山の樂器と樂譜とが在る。寢室、厨なども質素で好い。この家は他に競爭者も無いらしい。番人に「自稱（ソオ・グナンデス）ルタアハウス」の事を訊ねたら「無論賣物だ」と云つてのけた。伏見の桃山にはたしか「元祖手荷物預所」と云つたやうな店があつたと思ふ。

「エルフルト」は殆ど一瞥ですませ、ゲエテの詩で名高い「イルメナウ」へ向ふ。森林の中の青葉に埋もれた一寒村を胸に描いてゐた私は餘りに甚だしく其期待を裏切られたのに驚いた。數々火災に遇つた爲か凡てが新開地氣分で、自分の泊つた「椴樹舍（ホノル・タンネ）」といふのも道者宿めいて淺ましい。ゲエテが其最後の誕生日を祝つたと云ふ「獅子亭（ツム・レエウエン）」は一層低級である。夜の明けるのを待つて「キッケルハアン」の頂きの方へと志す。「すべての頂きに憩ひあり、すべての梢には一葉も動かず、小鳥は森に默（もだ）せり、待てよ嘲て汝（なぬ）も憩はんに。」といふ「旅人の夜の歌」で知られた場處である。なだらかな阪道を森の香を嗅ぎ、鳥の聲に耳傾けながら木の根、岩角に憩ひつゝ時餘にして頂上に達した。高い塔が眞中に聳えて、その傍に酒を賣る店がある。塔からの眼界は極めて廣い。夕暮唯一人此處に立つて脚下に蜿々と横たはる山巓を見下し、鬱然たる梢を眺めたらゲエテの詩句の心を切に味ふ事が出來るであらう。平和な靜寂な、そして嚴肅な自然の中に永遠に融け入りたい希願が心の底から湧き出づるであらう。「優しき谷、常磐の森、わが心喜びて再び汝を迎ふるなり。葉に重き枝を擴げて汝が蔭に我を招ぜよ」と云ひ「世の營みに、噫我疲れたり、悲しみも喜びも何するものぞ、甘き平和よ、來れ、噫、來れ我胸に」と歌つた心持も理解しうるに違ひない。「すべての頂きに憩ひあり」の句を壁に誌したと云ふ「ゲエテの小屋」は殘念な事に一八七〇年に燒失してしまつて今はその模造が出來てゐる。詩句も額面に收められて舊（もと）在つたと覺しい場處に掲げられてゐる。ゲエテの詩稿からでも取つたものか審かでない。ゲエテの休んだといふ腰掛も新たに据ゑられてゐる。はじめ鉛筆で彼の句を誌したのはたしか三十一歳の時である。それを八十歳を越した老ゲエテが最後にもう一度讀んではらはらと落涙し「さうだ、嘲て汝も憩はんに」と呟いたと云ふ事を曾て「ボーデ」の著書で讀んだ事がある。してみると私は寔に詩聖の足跡を辿り、その憧れと喜びと悲しみとの痕を弔つ

てゐるのである。今、ゲエテ其人の靈が四邊の山林木石の中に生きてゐるのを感ずる。否私の中に呼吸するのを感ずる。

三

歸途は「ガアベルバハ」の方を通つた。此處に在る「保養館（クウルハウス）」は「イルメナウ」を見晴す景勝の地を占め、空氣が清澄で、如何にも閑靜らしい。急がぬ旅であつたら暫時は足を止めたでもあらうが、次の機會に讓つて徐かに山路を下り夕暮「イルメナウ」の宿へ歸り、直に「ワイマアル」へ向ふ。

「ワイマアル」は奈良のやうに美しい小都會である。然し、勿論それ程の古色は無い。少し開け過ぎた感さへある。明るい潔らかな市である。ゲエテ、シラア、ヘルダア、井ーランド等の諸文豪の遺跡をはじめ畫家ルウカス・クラナハ、音樂家リスト等の記念も殘つてゐる。私はこゝに四日程止まつた。然し「ゲエテの家」、「シラアの家」、「ゲエテの園邸」、「ゲエテ・シラア文庫」、「クラナハの墓」、「シユタイン夫人の家」など無數の「觀る可きもの」を觀て廻り、觀たところの物を記載する事は控へる。それは餘りに數々傳へられてもゐるし、また多數の遊覽客と一緒に案内者の後について見て歩いた記念物は實のところ餘りに漠然たる印象を殘してゐる。ゲエテの自然科學に關する蒐集を見て今更其該博な頭腦に敬服した事や、シラアの髑髏に顔を背けた事や、ゲエテがシユタイン夫人へ宛てた佛蘭西文の書簡、ゲエテへ寄せたクライスト、ハイネ、カアライル等の筆蹟、ゲエテの日記、其他を懷かしく珍らしく見た事などは詳しく記す必要はあるまい。然し、侯爵家の墓地を訪れて、地下の石窟内に安らけく眠るゲエテ、シラアの柩の前に立つたときは一種崇高な感に撲れた。案内者も亦無言で徐かに其右手で吾々に詩聖の靈の安息の場所を指したのであつた。

丁度「ゲエテ協會（ゲゼルシャフト）」の開會中でワイマアルの各ホテルは滿員の盛況であつた。私はある畫家のパンジオンに泊る可く餘儀なくせられた。壁に蔦葛を搦ませた靜かな住ひで、ニイチエの終焉の家に近かつた。舊の宮廷劇場（ホーフテアタア）では恰もゲエテの「クラフイーゴ」を上演した。其の出來ばえは姑く措き、私共にとつて絶好の記念であつた。ゲエテの土地へ來て

ゲエテの大きな懺悔の一つを親しく聞く事のできたのは望外の喜びである。ベルヴェデエル公園の離宮には立派な日本の箪笥や、武者繪なぞがあつた。自然劇場も殘つてゐた。籬を巧に按配して瀟洒な屋外劇場が設けられてゐる。吾々も京都あたりに是非かういふ劇場を設けたいと思ふ。庭園内に頗る簡單に作る事が出來る。常磐木の植込で舞臺の袖や、出入口をつけ、芝生の上にベンチを据ゑれば宜いのだ。雨露風雪に依つて朽ち損ずる事の無い、永遠に綠する劇場である。夜は電燈を引き、篝火を焚く事も容易であらう。星影や月光を利用する事も一策である。野外音樂と相峡つて極めて典雅な清新な演戯を觀る事が出來ようと思ふ。ワイマアルの春秋は美しいであらう。夏も住むのに宜い。冬は然し餘りに淋しからう。總じて遊覽地氣分が聊か多過ぎる憾みがある。市としては「イエナ」の方が錆があつて奥床しい。恰も大學生の祝典のある日で、華かな團體の制帽を冠つた若者が歌ひながら市中を練り廻つてゐた。その中の三人を私はカメラに收めた。現像してみると一人の顔は眞黑で、一人の脚は中斷せられ、眞中の學生の顔には筋が入つてゐた。いづれも餘り前途有望ではないらしいが、ともかく約に依つて三人へ寫眞を送るつもりだ。シラアが處女講演として世界史の意義と目的とを論じた事に依つて名高い當地の大學は流石に伯林大學なぞよりも雅致がある。ゲエテが「子取魔神」の詩想を得たといふザアル河畔、パラダイスと稱する公園の邊は極めて美しい。

ライプチヒは「アウエルバハの酒場」と「國際戰爭記念碑」と恐らく世界でも屈指の「停車場」とが記憶に殘つてゐる。「酒場」の方は聊か眉唾物であるが、入口の具合が面白く、メフイストとファウストとが乘つて空中に飛揚したといふ古色蒼然たる樽が千五百何年と銘を打つて麗々しく飾つてあるのを看にして、ファウストに關する壁畫を眺めながら確かに一杯呑めるといふものである。――「記念碑」は意外に大規模な物で塑像家メッツナアの大作は實に眼を驚かすに足るものがある。死苦を現はす面、死者の靈を護る武人の姿なぞは深刻な印象を與へる。「時代」の錆が着いたら正に世界的の價値を生ずるであらう。

夢作る人

ハウプトマンの還暦祝賀劇

一

今年（一九二二年）の十一月十五日でゲルハルト・ハウプトマンは滿六十歳になる。その祝ひとして獨逸演劇協會の發起で八月十一日から同二十日に亙る十日間詩人の生地シュレジエン州の首都ブレスラウで祝賀劇が開催せられた。始め協會の副會長ワルラワア氏がリイゼンゲビルゲへ保養に出かけてゐる中に思ひ付いた仕事で、それは去年の八月の事だと云ふ。この計畫をラインハルトの後繼者と云はれるフエリツクス・ホレンダア氏に持ち込んで其贊成を得、詩人の承諾をも得た。加ふるにブレスラウ市で屈指の豪商バラッシュ氏が實務に當る事となり、更に豫て劇通として知られた國會議員ファイフエルト氏の贊助をも得て、茲に四頭政治が成立したわけである。ところが此の計畫が伯林の方から出た爲であるか、シュレジエンの州會では大多數で祝賀劇に對する補助を否決した。こゝで計畫

に一頓挫を來したがその中に贊成運動が新たに起つて、是非この夏に當市で祝賀劇を開催して貰ひたいといふ事になつた。總裁と市長とが代表者となり、委員が伯林へ上つて打合せをするといふ勢で、愈々この催しが實行の緒に就きこの夏には大統領エーベルト氏夫妻が當事者及贊成者の主なる者を自邸へ請待して盛大な園遊會を開きこの企てに氣勢を添へた。かういふ紆餘曲折のあつた事などは勿論後に知つたのであるが、何につけても今だに分裂主義の弊がこの國に絶えないのは遺憾千萬だ。尤も目下の國情の下にかういふ大規模の藝術的事業を企てるといふ事はかなり問題であらうし、そこを思ひ切つてやり通すところが又獨逸人の事に當つての根强さと藝術的欲求の熱烈さとを語るもので大に頼もしくもあるわけである。私は豫てからこの計畫に注意してゐたが、南獨から維也納、ブダペスト、プラアグと旅をつゞけて歸つてみると、何時の間にか伯林では切符が賣切れてゐたので、大に狼狽して電報でブレスラウのバラッシュ商會へ申込み、辛うじて十日間の切符を豫約することが出來た。一方には宿の世話をその方の事務所へ掛合ひ、幸にもある休職教授の住居の一室を借り受ける事になつた。

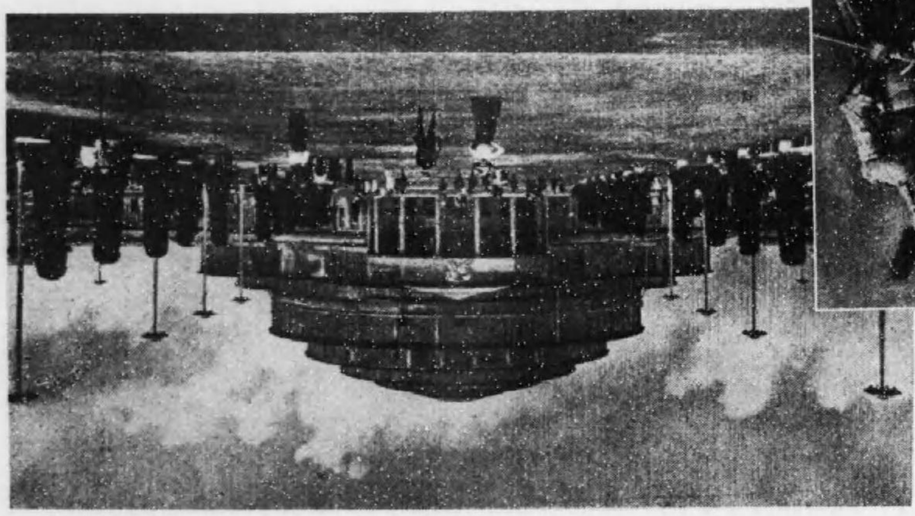
ハウプトマンの塑像
（クルト・クロオナア作）

プログラムはハウプトマンの代表作十三を擇び、三つの劇場で上演する事になつてゐた。即ち「獨立記念館」で「フロリアン・ガイエル」と「織匠」を、「市立劇場」で「敵者ヘンシエル」、「犧牲」（即ちインデイボーデイ）、「ロオゼ・ベルント」、「シユルツクミヤウ」及「ハンネレの昇天」を、「ロオベ座」で「獺の衷」、「沈鐘」、「カアル皇帝の人質」、「寂しき人々」、「さてピツパは踊る」、「クラムプトン教授」を演ずる豫定であつた。この中「沈鐘」は「ガブリエル・シルリングの遁走」の代りに臨時に据ゑられたのである。十日間に十三曲であるから、どうしても三曲は割愛せねばならぬ。私は「シユルツクミヤウ」、「織匠」、「ハンネレの昇天」の三つを斷念せねばならなかつた。

ブレスラウ市は祝賀劇見物の人々で非常に賑つてゐた。到る處にハウプトマンの作物、評傳、肖像、俳優の寫眞などが並べられ記念牌のやうなものまで出來てゐた。エレツサア氏に依つて改修補充せられたシユレンタアの「ハウプトマン傳」を始め、マルクーゼ氏編纂の論文及舞臺意匠、フエヒテル、フライハン兩氏の評傳、ヘエニツシユ氏の「ハウプトマンと獨逸國民」、演劇協會の祝賀文集其他が新に出版せられ、ユリウス・バツプの梗概書

ハウプトマン
夫人と令息

自邸の前に立つハウプトマンと末子ベンヴェヌート



（ウラヌンク）開会記念式典

「ワロ」ペヤ・ペルネ
ペルー「ペルーの
ナ・リヴィ
ア）

ハウプトマンの「鼠」
（ヘエフリヒとフオン・キンタアシュタイン）

「寂しき人々」
（モイツシイとシュトラウブ）

「獺の裘」
（ヤンニングス
『とニイゼ）

「沈鐘」（伯林大劇場）

「さてピッパは踊る」

エッカアスベルグと
ヤンニングス）

「馭者ヘンシエル」
（ヘエフリヒとフオン・ホンタアシュタイン）

（上同）［トンルベ・ゼオロ］

「肅伯クラムプトン」
（パッサアマン）

「寂しき人々」のアンナ
（エルゼ・レエマン）

もこの機會に大に賣れたやうであつた。私は今是等の書物を悉く參照して詩人を品評する暇を持たない。私は自分の見たところに依つて所感を述べてみたいと思ふ。

二

武器の積まれた神壇から　再び焰の燃え出た　あの祝ひの日を　吾々は決して
忘れまい——
大膽な同情の聖火に　燃えつゝ　死ぬべき生き身から　燒き取つたものを。
空虛なるが故に　その器を毀ち　そして不朽の形なる「人間」の前に再び
その心を屈した　詩人を祟めよ。
彼の炬火は　地球を灼く焰となり——　その淨火はやがて　われ等若き者の骨髓に
燃え入り　その核心に喰ひ入つた。
われ等若し悅びの歌をうたひ　新しき抱擁の殿堂に　新しき神壇を築くとき——
その闕に感謝の像を　彼のために建てよう。

眞晝の光に惠まれた　最も紅い薔薇を　彼に捧げよう。
愛の泉から　その詩作を汲み取つた彼に！　（フリッツ・フオン・ウンルウ）

數多い祝賀文の中に先頃還暦を祝はれたシュニッツラアの一文が眼に止まつた。同年輩の作家として並行した道を歩いて來た詩人の感慨には一種しんみりした愼ましい同情の心が漾つてゐる。「そして吾々が一歩々々夕暮の道を辿り、果ては吾々凡てを裹むかの無限界に近寄つてゆくに從ひ、吾々の肉眼にはこの並行した道が益相接近するやうに思はれ、旅人の呼び交はすあらゆる聲が愈親しみを增して來ます。ゲルハルト・ハウプトマンよ、若し今日貴下が私の呼び聲から私に對して貴下及貴下の藝術が何を意味するかを聽き取つて下すつたら、それで私は滿足します。そして私がこの感情に充ちた心から貴下と私とそして吾々凡てに何を望むか、それは別に茲に言明しますまい。云々」――今年の正月十三日、伯林の「レジデンツ座」で還暦祝賀劇として「廣き國」がイレエネ・トリイシュの一座で上演せられたとき、舞臺に立つて謝意を表したシュニッツラアの謙虛な重厚な風貌を想ひ出すと、兩詩人の世間的待遇の逕庭と獨墺兩國の國情の差といふ事を考へずにはゐられない。けれども「寂しき道」の作者としてはあゝした靜なしんみりした一夜の方が華々しい祝賀劇の興行よりも本望であり、又その人に似つかはしくもあつたであらう。シュニッツラアを想ふとき、あの瀟洒明媚の中に一種頽廢の氣を帶びた維也納の都が眼の前に現はれ、ハウプトマンを考へるとき靜寂幽邃の氣に暴風雷鳴を孕むリイゼンゲビルゲを髣髴せざるを得ない。今私はその「巨人山」とも譯すべき山脈の廣大な谷間に來て筆を執りつゝあるのである。ハウプトマンの住むアグネエテンドルフは山傳ひに二時間はかりの道だ。私はT君と一緒に雨を冒してその山莊を訪ねた。ハウプトマンは散歩に出て留守であつた。別に面會を求める意志は無く、唯、村と詩人の住宅とを一見すれば望みは足りたのであるから名刺を殘して歸つて來た。それより前にブレスラウで無名の手紙を詩人に送つた事がある。之に就いてはまた後に記す。以下見物した劇に就て叙說しよう。

フロリアン・ガイエル

この史劇で祝賀劇が開かれるのであつた。劇場に充てられた「獨立記念館」といふのは

直譯すれば「世紀館」といふので一八一三年の自由獨立戰爭の百年記念として建てられた廣大な建物で、圓屋（クッペルバウ）の形式としてはコンスタンチノオペルのソフィヤ教會及羅馬のパンテオンを遙に凌駕し、世界一だと稱せられ、そのオルガンだけでも戰前の約十萬馬克を費したと云ふ。目下展覽場、音樂會場及歳市（ゾッセ）の會場として用ゐられてゐる。如何にも廣大な建築で優に一萬人以上を容れる事が出來る。ライプチヒの國際戰爭記念塔には其質に於て到底及ばないとしても記念的建造物として指を屈するに足るものがある。その傍の庭園には清い池があり、蔦葛の搦んだ半圓形の石柱廊（ゾイレンガング）が綠の芝生を圍んで、段丘には無數の卓子が据ゑられてゐる。音樂を聽きながら盃を擧げると別天地に遊ぶ心地がする。更に公園の小徑を迂曲して鬱葱たる樹間を逍遙すると泉石、木橋などの趣が一寸日本の庭園を想はせる。この邊は一帶に槲樹（アイヒエ）が多く、好んでこの土地の森林を歌つた浪曼派の詩人アイヒエンドルフの像を始め、キヨルナア、シラア等の記念像が青葉に埋れて靜かに立つてゐる。是處からォーデル河畔一帶に亙り、ブレスラウは私の豫期を裏切つて非常に美しい都會であつた。更に古色蒼然たる加特力教の多くの寺院伽藍の建築美を併せて考へるとき、恐らくこの市は獨逸全國に亙つて最も美しい都市の一つに數へらる可きであらう。かのフライタハの小說「ゾル・ウント・ハアベン」の中に說かれた「ワイスゲルバア小路（ガッセ）」を始め古い小路や古雅な形をした門なども多く見られる。一帶にシユレジエン州はリイゼンゲビルゲを中心として口碑傳說に富む地である。そして一方に商工業地として昔から聞えてゐる。灰色の實生活と夢幻的な童話の世界とが此處に融合してゐる。ハウプトマンが自然主義から出發して浪曼主義に移り、神祕思想に入つたのも偶然ではない。

建築としては雄大であるが獨立記念館は劇場として全然不適當である。この點には當事者も餘程苦心したらしいが、矢張結果は失敗であつた。一般に外的動作に富み「群衆」の場面の多い史劇「フロリアン・ガイエル」と社會劇「織匠」とを此處に充てたのは首肯せられるが、それでも强い「反響」が臺詞の徹底を妨げ、印象が散漫になる弊を脫却する事が出來なかつた。「フロリアン・ガイエル」は詩人が最も自信のある作であつたと同時に舞臺の上で最も甚だしく失敗した戲曲である。「沈鐘」は詩人がその悶悶の情を洩らした、著しく懷疑的の作品だと云はれてゐる。然しながらシユレンタアもバッブもこの史劇の一大力

作である事を認め、多くの缺點があるに係はらず、悲劇的精神の昂揚と性格發展の徹底と境遇描寫の周到とに於て最も傑れた作品の一つと稱揚してゐる。私は必ずしもこの說に同ずる者ではないが、ハムレット型の英雄としてのガイエルが農民の味方として僧侶及騎士に對抗し一身を犧牲にしながらも、終に十分の信賴と諒解とを得ずして事毎に蹉跌し、終に悲壯の最後を遂げるに至る過程は寧ろ抒情詩として多くの部分美を持つ事を認める。陣中の愛妾マライに甲冑を附けさせながら再び生還を期せざる覺悟を洩らす邊はシラアの描いた「ワルレンシュタインの死」の場面を想はせるやうな悲壯美を發揮してゐる。ゲエテの描いたのとは正反對にゲッツが一の卑小な姦雄として現はれるのも面白い。又ガイエルの愛妾マライはクライストのケエトヒエンに似た「忠實な牝狗」の型で、ピッパ又は「カアル皇帝の人質」中の少女ゲルズイントと一味共通の自然に根ざした暗い魔的の魅力を持ち、この刀槍の響きと硝煙とに充ちた革命劇の一輪の花として匂つてゐる。一の自然主義的史劇の試みとして、言語風俗の方面に精緻な研究を積み、境遇の描寫に全力を注いだ點は社會劇としての「織匠」の傾向と手法とに比肩すべきものがある。この二つの劇が獨立記念館で上演せられたのも偶然ではない。

主人公は伯林のォイゲン・クレッフアが演じた。音聲を痛めてゐたに係はらず流石に場を壓する力を發揮したのは多とせねばならない。驅氣に富み、傲岸な風を帶びつゝも、一方中々の技巧家である彼はこの困難な役に相當に成功してゐた。この「恐る可き劇場」をあれ程に支配し得たのは非常な努力の結果と云はねばならぬ。たしか二日目あたりから咽喉を痛めて止むなく代役に讓る事になつた。ガイエル役者としては當今屈指の部であらう。然しながらハムレット型の英雄として、事業の人としてよりも寧ろ瞑想の人、言葉の人としてのガイエルを現すには幾多の遺憾があつた。彼には「力」はあり、技巧も相當にあるが、「抒情的氣分」は缺けてゐる。期持してゐた第四幕も泌々した感じを與へなかつた。これは場處の關係上無理に音聲を張らなければならないので勢ひ上調子になつた爲であらう。カアル・ハインツ・マルテインのレヂーも缺點はありながらも先づ無難の出來と云はねばならぬ。簡素の雄大といふ事は望めなくとも少くとも簡潔であつた。

劇中の一人物が「獨逸分裂思想の心臟へ」と叫んで短劍を扉に刺したときには滿場拍手

喝采した。ハウプトマンの肖像を刻んだ記念牌の裏面にも短劍に貫かれた心臟を現はし、この言葉を錄してある。この農民叛逆劇が祝賀劇の劈頭に掲げられたのも意味ある事である。舞臺の上へ迎へられたハウプトマンは白髮赭顏の福々しい溫乎たる風采の持主であつた。キューネマン教授の講演に依つて髣髴せられた「日の出前」初演時代の痩せた神經質の蒼白い一青年詩人と比して何といふ相違であらう。「戰を通じて光明へ」といふ言葉が此處でも思ひ浮べられる。そして生前この光明に接する事の出來る彼は文壇異數の幸運兒と云はねばならぬ。

馭者ヘンシエル

市立劇場（シュタットテアタア）は纏まつた感じのする好い小屋である。豫期に反してこの祝賀劇見物に來た日本人は私の外に朝鮮のT君と仙臺のK氏とたつた三人切りである。それが必ずしも同一の出し物の切符を持つてるず、少くとも私は度々場内唯一人の日本人として坐る場合が多かつた。「日本人（ヤパアナア）！」といふ私語（ささやき）を到る處で聞く。慣れたもので蚊が刺す程にも感じない。それでも二度ほどおんと鐘が鳴つて同時に觀覽席の燈火が消え、ぱつと舞臺が明るくなつて靜かに幕が上る段になると本當に落ちついた氣分になる。國境を撤し、人種を超越した假象の世界が開かれるのである。此幕の上る刹那の微妙な氣分に就て誰かゞ書いてるたやうに思ふが、それは生活と藝術との間に横はる一線が拭ひ消さる可き意味深い瞬間なのである。

殊に「馭者ヘンシエル」の舞臺は飽迄自然主義的のそれで、人生の一片、それもこのシユレジエン州の一隅から取つて來た場面である。人間もつい先刻往來で出逢つたやうな人物ばかりである。言葉の訛もその儘である。その土地に來て、その生活に觸れてゐると自分までが劇中の一人物のやうな氣がする。それ程レヂーも演出法も寫實的であつた。もう餘程以前に日本譯が出てゐるから、この劇の筋に就て語る必要はないであらう。「踏切番人ティール」の性格と運命とに酷似してゐる事を指摘すれば十分である。犢の樣に逞しい肉體と小兒の樣に愚直な敬虔な心の持主である主人公が、强烈な意志と情慾とを持つた著るしく主我的な女に捉はれ裏切られて自ら縊首するに至る迄の過程は杜翁の「闇の力」に似